俺ガイル×ニセコイ

従属人間

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ニセコイの世界にもし比企谷八幡がいたら？

という妄想を元に書き始めた作品です。

基本的に俺ガイルからは八幡しか出ません。

とか言ったけど小町も出るよ！

八幡はニセコイのキャラ達に合わせ高校１年生です。

今作品はｐｉｘｉｖにも投稿しています。

目次

1 ―― 1
2 ―― 6
3 ―― 14
4 ―― 23
5 ―― 35
6 ―― 41
7 ―― 47
8 ―― 55
9 ―― 62
10 ―― 69
11 ―― 78
12 ―― 86
13 ―― 94
14 ―― 103
15 ―― 114
16 ―― 136
17 ―― 143
18 ―― 154
番外編・『星が瞬くこんな夜に』 ―― 127

1

青春とは嘘であり、悪である。
青春を謳歌せし者達は常に自己と周囲を欺き自らを取り巻く環境の全てを肯定的に捉える。
彼らは青春の2文字の前ならばどんな一般的な解釈も社会通念さえ捻じ曲げてみせる。
彼らにかかれば嘘も秘密も罪科も失敗さえも青春のスパイスでしかないのだ。
仮に失敗することが青春の証であるなら友達作りに失敗した人間も
また青春のど真ん中でなければおかしいではないか。
しかし彼らはそれを認めないだろう。全ては彼らのご都合主義でしかない。
結論を言おう。
青春を楽しむ愚か者ども、砕け散れ。

俺の担任教師である日原教子は、朝の職員室で俺の作文を大声で読み上げる。
「ねぇ、比企谷。私が入院中の君に救済措置として出した課題はなんだったかな？」
「…はぁ、『中学生活を振り返って』というテーマの作文でしたが」
「そうだね。それなのになんで比企谷は犯行声明を書き上げたのかな？
事故で怪我したのは足だけじゃなくて頭も怪我しちゃったのかな？」
まるで可哀想なモノを見る目でこちらを見てくる日原先生。

そう、俺は入学式の前日事故にあっているのだ。
そして、3週間程入院することとなりその間授業に出れなかった分を
今回の分でチャラにしてくれるというのだった。
そして今日が高校初登校なんだが救済措置として出された作文の内容がお気に召さ
なかったのか、
今こうして呼び出されている。

これまでの経緯を振り返っていると頭を叩かれる。
「真面目に聞きなさい」
「はぁ」
「まぁ、人助けをした結果の入院だし、今回はこれくらいにしてあげる。それにそろそろ…」
それにそろそろ…」
まぁ、人助けした結果というよりも気が付いたら助けてたってだけなんだが…
それより、そろそろなんだというのだろうか？
なんて思っていると、後ろでドアの開く音が聞こえる。

「すいません。今日から転校してきた桐崎という者なんですけど…」

今日から転校してきたってまた変な時期に転校してくる奴もいるんだな。
なんて考えてると日原先生が声を上げる。
「あぁいらっしゃい。あなたが桐崎さんね。待ってたわよ」
ふむ、そろそろと言ってたのはこういう事か。
桐崎と呼ばれた転校生がこちらへ向かって来る気配を感じる。

じゃ俺はそろそろ教室へ向かうとするか。
と、俺が教室に向かおうとドアの方へ振り返ると
やたら可愛らしい金髪の女子と目が合った。

ふむ、こいつが転校生か。
けっリア充の匂いがぷんぷんしやがる。
なんて目を腐らせていると…
てか、目を腐らせるって何だよ。
「ひっ…ゾンビ?」
目の前の転校生が可愛らしくおびえながら酷い事を言っている。
俺じゃなかったら傷ついて2度と顔見れなくなるレベル。
あ、そもそも俺のこと見ようする奴いなかったわ。…やめよう、泣けてきた。
「こら、怯えるのは分かるが声に出すのはやめないか。
とりあえずこれから1年間、同じ教室で学んでいく友達なんだから」
先生がかなり酷いことを言ってる。
なに?俺と目が合うとみんな怯えるの?なにそれ悲しい。

でも、否定できないから余計悲しい。
俺が心の中で泣いていると、転校生が
「あ、いきなりごめんね」
と、素直に謝罪をしてくる。
「まぁ、気にすんな。そんくらい慣れてる。」
むしろ謝られる事に慣れてないまである。
少々恥ずかしく、顔をそっぽに向けながら頬を掻いてると
「ふふっ、慣れてるって変な奴」
転校生が笑っていた。

「そろそろ時間もないし朝のＳＨＲで紹介するから、２人とも何か自己紹介考えておいてね」
ん？今聞き捨てならない言葉が聞こえたゾ？
「せ、先生『２人とも』って、俺もですか？」
「当たり前でしょ。今日が初登校なんだからみんなにちゃんと挨拶しなきゃ」

Ｏｈ…

2

場所は変わり1―Cの教室前。

先に日原先生が教室に入っていく。

「…よーし今日は転校生と諸事情によりクラスへの参加が遅れた奴を紹介するぞー。入って、桐崎さん、比企谷くん」

「はい」

「うっす」

先生に呼ばれ教室内に入っていく桐崎と俺。

ザワッ

ザワッ

おおーーーーーーー!!

ヒィ!!

お、おぅ?

クラス内で男女問わずの歓声と一部の男子の戸惑いの声と女子からの悲鳴が聞こえる。

やっぱり俺の目を見ると怯えちゃうのね…

当然の結果（俺の目を見て怯えるのはやはり当然なのか？）にへこんでる俺を余所に
先に自己紹介をするのは桐崎。
「初めまして！アメリカから転校してきた桐崎千棘です。
母が日本人で父がアメリカ人のハーフですが、日本語はこの通りバッチリなので
みなさん気さくに接して下さいね！」
最後に笑顔で自己紹介を終える桐崎。
綺麗な金髪だと思っていたが、なるほどハーフだったのか。
なんて思いつつ俺もさっさと自己紹介を済まさなければ。
「えぇと…諸事j「うぉーーー!!かわいいー!!」「すっげー美人!!」
「足細―い!!何あのスタイル～!!」幡です」
あれ？俺の自己紹介聞こえた？せっかく噛まないで言えたんだけど…
大勢の前での自己紹介で噛まずに言えた初めての感動と
それを誰にも聞いてもらえなかった悲しみが同時に…って
誰にも話聞いてもらえないのはいつも通りだった。

我ながら悲しい事を考えていると桐崎と
どっか見たことあるようなないような男子生徒と言い争いをしている。

なんでも登校中に桐崎があの男子生徒に膝蹴りを喰らわせたとか。
それで謝罪が雑だったのが気に食わんと…
贅沢な奴だな。俺なんか
『まぁ、ヒキタニだしいっか』
てな感じで謝られたことなんて滅多にないのに。

俺が悲しい過去を振り返っている間にも2人はヒートアップしていき
「この…猿女!!!」
男子生徒が決定的な一言を言い放ち
「誰が猿女よ!!!」
と、言いながら強烈な右フックを喰らわせ男子生徒を撃沈させた桐崎。
女子を怒らせると怖いなって思いました。

…てか、桐崎ってなんな性格だったのか。
朝見た時とは大分違ってる気がするが…
気を付けよ。話すことないだろうけど。

朝のＳＨＲを終えて1時間目が始まるまでの小休憩の時間。
座席の位置が分からず突っ立て廊下で未だ言い争いを続けている2人を眺める。
すると突然声をかけられた。
「オース、ヒキタニ。一緒の高校だったんだな。
まぁこれから3年間仲良くやってこーぜ」
ヒキタニって誰だよと思いながらも、肩を叩かれたので俺だろうと振り返る。
「お、おう」
…誰だ？この馴れ馴れしいメガネは。
俺にこんな知り合いはいないんだが…

思ってる事が顔に出てたのかメガネが困ったような顔をして
「あ、あれ～？わかんない？同じ中学だったんだけどなぁ」
ふむ、同じ中学か。あまり、というか全く良い思い出の無い中学時代を振り返る。
……あぁ、そういえば何かと女子にセクハラとかして騒いでた奴か。

名前は確か、ま、マイ、マイ…
「確かマイマイだったか？」
「マイマイじゃねーよ！舞子だよ！舞子集！」
「そうだったか。すまんマイマイ」
「だからマイマイじゃねーよっ」
なんてどーでもいい会話に新たな人物が加わる。
「もう、舞子君。ヒキタニじゃなくてヒキガヤ君だよ。
それに比企谷君もちゃんと名前覚えてあげないとダメだよ」
澄んだ可愛らしい女子の声

俺はこの女子を知っている。

小野寺小咲
濃い目の茶髪で、左側のサイドの髪が長い、アシンメトリーな髪型が特徴。
おっとりとした性格で他人を気遣う優しさと、守ってあげたくなるような
小動物のような可愛さを併せ持つ中学時代から多くの男子から支持を集めている女子。

「お、おう、そうだな。すまん」
俺みたいな奴にも声をかけてくれたりするこの小野寺の優しさを、
『あれ、もしかしてこいつ俺のことが好きなんじゃ…』
と、勘違いした男子共が立て続けに玉砕したというのは今も覚えてる。
まぁ俺も、その勘違い男子の一員に含まれていたんだけどな。
玉砕、というかそもそも告白しなかったけど。
だって俺と話すとき大体、顔俯いて変にそわそわして目を合わせてくれなかったし。
好きなんじゃね？って思った時期もあったが、冷静になると嫌々話してかけてくれてたみたいだったし。

「そ、そういえば比企谷君、事故にあったて聞いたけど大丈夫だったの？」
「あぁ、つっても俺が飛び出す形になったら自業自得なんだがな」
「そ、それでね少し聞きt「えええーーーーーーーーー!?」っ！」
ビクッとしてる小野寺可愛い、なんて思いつつ声の発生源へ目を向ける。

どうも言い争いをしていた男子生徒と桐崎の席が隣同士なのが気にくわないらしい。

「じゃ、頼んだからな一条」
そう言い残し去ろうとする日原先生。
そうかー男子生徒の名前は一条と言うのかー。
そういや中学の時にもこんな奴がマイマイと一緒に騒いでたような…
「って、待って下さい。先生！」
「ん？どうした、比企谷」
「いや、俺の席は？」
「あーすまんすまん。忘れてた。」
いや、忘れるなよ。
「そうだなぁ…比企谷の席は」
と、言いつつ先ほどまで会話していた小野寺へ目を向ける日原先生。
「じゃ小野寺の隣で、頼んだよ小野寺」
そんな適当でいいのか教師。
「いや、そんｎ「えええええーーーーーー!?」っ！」
俺が抗議しようとすると隣で小野寺が顔を赤くしながら叫んでいた。
急に大きな声を出さないで欲しい。ビクッとする俺とか可愛くないし、むしろキモイ。

自分で思った事に軽くダメージを受けつつも何とか抗議を続行。
「ほ、ほら先生、小野寺も迷惑のようですし…」
「め、め、迷惑とか、そんにゃ事にゃいよ!!!ただちょっと驚いたというか…
と、とにきゃく大丈夫りゃから!!」
「お、おう。じゃぁこれからしばらく頼む」
噛み噛みでテンパッてる小野寺可愛い、と思いつつ勢いに押されつい返事をしてしまう。

席に着き寝る体制に入る。一条と桐崎がまた騒いでいるがどうせ下らない事だろう。
一日はまだ長い。それに授業が始まるまであるし、少し寝よう。
そう思い俺は瞼を閉じた。

3

チャイムの音が聞こえ、目が覚める。
そしたらなんと!!!

放課後でした。

…あるぇ？一日はまだ長いとか言ってたのに放課後になってるよ。
一日中寝ても誰も気付かないとか、初日からステルスヒッキー仕事しすぎだろ。

くだらない事を考えながらも帰宅しようと席を立ち、教室を出る。
下駄箱へ向かいながら廊下を歩いていると声をかけられた。

「おーい、比企谷。ちょっといいかな」
振り返ると額に青筋を浮かべ、お怒りの様子の日原先生が立っていた。

…ふむ、なぜこの先生は怒っているのだろうか？
「登校初日から一日爆睡とは、イイ度胸だね。付いて来なさい」
なるほど…やったね！八幡！日原先生は気付いてくれたよ！
なんて少し現実逃避をしつつ、今日は帰りが遅くなるなと思いながらも
日原先生の後を追っていく。

場所は変わり職員室。

目の前には少し落ちついた様子の日原先生。
「朝の作文の件は、まだいい。だが今回の件は流石に見逃せないな。
よって比企谷には罰を与えます」
「罰って反省文ですか？分かりました。何時までに提出すればいいですかね」
「何を勘違いしてるか分からないけど、今回比企谷に与える罰は反省文じゃないよ」
勘違いって…大体こういうのは反省文ってのが当たり前じゃないの？

疑問に思ったことをそのまま聞くと
「君に反省文を書かせたところでまた碌でもない内容に決まっているでしょうに」
「いや、決まっているって…俺だって反省文くらいちゃんと書きますよ」
多分
「…内心、多分って思ってない？」
先生が疑わしげな目で俺を見る。
「お、思ってないでしゅよ!?」
なんで考えてることが分かるんだよ。
「…はぁ、とにかく比企谷には反省文とは別の罰を与える。」
「まぁ、分かりました。
で、俺は何をすればいいんですか?」
「そうだな…今回、君に与える罰は一条と桐崎のサポートだ」
…ＨＡ?
「え、えっと…どういうことですか?」
「なんでも一条と桐崎の言い争いの原因とも言える出来事の際に
一条の大事なペンダントを無くしてしまったらしいんだけど、
今２人はそれを探しているみたいなの。

君にはそのサポートをしてもらう。
これが今回の君への罰だよ」
なるほど、わからん。
「あ、あの、どうして俺がそんなことを…」
「言ったでしょ。罰だって。
それに登校初日だというのに、寝て過ごしていたんじゃ
大した交友関係も築けていないんじゃない？
これを機に交友関係を広げ、楽しい高校生活を送ってもらおうって言う
先生からの気遣いでもあるんだからね」
まぁ、今後も交友関係築いてくつもり無いですけど。
「まぁ…分かりました。
ところでそのペンダントってどんな物ですか？
特徴とか教えてもらえれば探しやすいんですけど…」
これは多分なにを言っても最終的に頷かされそうだし、
早々に抵抗をやめ、必要な情報を集めようとする。
「はぁ…」
なんか溜め息吐かれたんだけど、どうゆう事なの？

「話を聞いてなかったの？
交友関係を広げる為だって言ったんだからそういうのは本人達に聞きなさい」
…マジか。あんなクラスの注目集める2人に話聞くとかボッチの俺には無理だろ。
いや、ボッチじゃなくても躊躇うぞ。いつ巻き添えくらうか分からないし。
「まぁ、今日はもう遅いからいいわ。
詳しいことは明日本人達から聞きなさい。
じゃぁ気をつけて帰るのよ」
「えっと…失礼しました。」
まだ、いくつか言いたい事はあったが、確かにもう遅い時間だ。
挨拶をして職員室を出る。

今日はいろんな事があって疲れた。まぁ朝と放課後しか起きてなかったけど。
思ったより遅くなっちまったし早く帰ろう…

自宅

「たでーまー」
そう言いながら玄関をくぐり、家に上がる。

リビングのほうから足音が聞こえてくる。
「おかえり、お兄ちゃん」
妹の小町が笑顔で出迎えてくれる。
「で、どうだったの？高校生活初日は？
帰りが遅かったみたいだけど、職質でもされたの？」
比企谷小町
俺の妹、可愛い、天使。
以上！
それにしても遅くなった理由で真っ先に出てくるのが職質とか悲しすぎるだろ。
確かに今までにも何回かあったけどさ。
「いや、今日から転校生が来たみたいでソイツのおかげで

相変わらずボッチのまんまだ。
まぁ転校生が来なくてもボッチでいるつもりだったけど。
あと、帰りが遅くなったのは先生に呼び出されたからで、別に職質されてたわけじゃない」
「あちゃ～、それはタイミングが悪かったね。
それで何で初日から呼び出されちゃったの？」
笑顔から可哀相なものを見る目に変わる小町。
「いや、朝のＳＨＲが終わってから少し寝ようと思ったら
放課後になっててな。それでだ」
「初日から何やってんだか…このゴミいちゃんが」
可哀相なものを見る目から、さらに蔑むような目にランクアップした小町。
というか小町ちゃん？ゴミいちゃんはやめようね。
あとそんな目で見るのもやめて。お兄ちゃんうっかり死んじゃいそうだから。
「そんで、なんかよくわからん事させられる事になった」
「どんなの？」
不思議そうにする小町。
そこで放課後先生から聞いた話を簡単に説明する。

「……という事らしい」
「やったね！お兄ちゃん友達作るチャンス到来だね！」
「いや、チャンスとかじゃないから。
友達とかいらないし、放課後にそんな訳の分からん事に時間使うなんてアホらしいだろ。
それに小町と過ごす時間が減るんだぞ！」
「それはお兄ちゃんの自業自得でしょ」
た、確かにそうなんだが…
「とにかく！その2人の事をちゃんと手伝ってあげる事！
こんな事でもないと、お兄ちゃん人と関わろうとしないでしょ。
そのまま仲良くなってくれれば文句なしだけどね！
一度しかない高校生活なのに友達も出来ず
お兄ちゃんが寂しい青春を送るんじゃないかって心配だったけど
……ってこの兄想い加減小町的にポイント高い！」
…ホント兄想いの良い妹だよ。
最後の台詞が無ければもっと良かったんだけどな。

とにかく、小町にここまで言われたからには頑張るか。
どんなネックレスなのか特定できる程度には会話をしよう。

「あ、ご飯出来てるからね～」

まずは小町の手作りご飯を食って英気を養うとしますか…

4

小町を中学校まで送り届け、登校する。
教室へ入り、自分の席を目指しながら軽く教室内を見渡す。
一条はすでに登校してるようで、ま、舞、マイマイと小野寺、あといつも小野寺と一緒にいるメガネの女子と話をしている。
桐崎はまだ登校してないようだ。
ペンダントの件をどうしたものかと、悩みつつ席に着く。
席に着いたところで声をかけられる。
「おはよう。比企谷くん」
「お、おはよう！比企谷君！」
メガネ女子と小野寺である。
…あれ？さっきまで一条達と話てなかったっけ？
チラッと一条達がいたほうを見ると、
物凄い表情をした一条と、ニヤニヤ面したマイマイがこちらを見ていた。
一条はまだいいとして、なぜだろう？マイマイのあの顔を見てるとすごく殴りたく

なってくる。
「ちょっと、聞いてるの？比企谷くん？」
目線を元に戻すと半目でこちらを見てくるメガネ女子。
「お、おう、わりぃ。
で、なんか用か？」
「私は特に用は無いんだけどね。
小咲が比企谷くんに渡したい物があるんだって。
ほら、小咲」
「ちょ、ちょっとるりちゃん?!」
メガネ女子の名前はるりと言うらしい。あだ名はルリルリだな。
ルリルリに背中を押されるように前に出る小野寺。
渡したいものか…不幸の手紙とかだったらどうしよう…
少し構えて小野寺が話すのを待つ。
「あ、あのね、比企谷君昨日ずっと寝てたでしょ？
それで授業の内容が分からないんじゃないかなと思って、役に立てばいいんだけど」
話の内容からして昨日の授業を纏めたであろうノートを差し出して来る。
「帰りのＨＲ終わったときも起こしてあげようと思ったんだけど、委員の方で呼ばれ

ちゃって…」
困ったような笑顔を浮かべる小野寺。
こういった優しさが、多くの男子を勘違いさせ、
結果死地へと送り込む事になるんだな…

「いや、大丈夫だ。
昨日の件は俺が悪かったし、小野寺が気にするような事じゃない」
そう言い、「もう話すことはありませんよー」とオーラを出しつつ机に伏せる。
「ちょっと、比企谷くん？
せっかく小咲がアナタの為に纏めてあげたんだから受取ってくれてもいいんじゃない？」
話終わったよね？「話しかけんなオーラ」感じ取れなかったの？
リア充（笑）って奴は空気読んだりすんの得意なんじゃないの？
顔を上げると、ルリルリが「なんでもいいからとにかく受けろれや」オーラを発している。
怖い、めっちゃ怖い。あと怖い。
表情は変わらないのに身に纏うオーラが半端ない。ルリルリは覇気の使い手だった

のか…

「あ、いや、そのなんだ。アレがアレだから大丈夫…」

そう言うと一段と覇気が強くなった気がする。

「と思ったけどやっぱりありがたく借りようかな。うん。サンキューな、小野寺」

このままだとどうなるかわからん。ここは受取っておいた方がいいだろう。

ルリルリの覇気が収まるのを感じる。

「う、うん!なるべく分かり易く纏めたつもりだけど、

それでもわかんない所あったら聞いてね!!」

しょんぼりとした顔から一変、嬉しそうな笑顔で話す小野寺。

守りたいこの笑顔。

しかし「アナタの為に〜」なんて聞くとつい勘違いをしそうになるが、

小野寺のことだしきっと優しさからの行動だろう。

こういった行動に何かしらの意味を見出しそうとしてしまうのは

モテないが故の悪い癖だな。

一先ず、ノートも受け取ったしもう、用は無いだろうと再び机に伏せようとして、ふ

と思う。
この2人なら一条と桐崎の探し物を知ってるかも知れない。
先ほどまでも話をしていたようだし、聞いてみるだけ聞いてみよう。
「なぁ、少し聞きたいことがある」
首をかしげる2人に昨日の放課後の出来事を話す。

「と、言うことなんだが…なにか知っているようだったら、教えてもらえると助かる」
2人の回答を待つ。
「あぁ、それなら…」
そう言いながら色々な、それこそいらない情報まで教えてくれる2人。
いや、俺から聞いといていらない情報っていうのもアレだが…
2人から得た情報を簡単に纏める
・十年程前に女の子から貰った。
・なんか約束して覚えてたら結婚しよう！
・特徴的な形をしていて真ん中に鍵穴が付いている。
最初の2つホントいらなかった…。が、取り合えず探すべきものは分かったから良し

とする。
しかしアレだな、一条の頭の中はお花畑かなんかか？
自分が覚えてたところで相手の子が十年も前のことなんて覚えてるはずがない。
仮に相手の女の子が覚えてたところで
『は？なに子供の頃の事本気にしてんの？キモッ』
とか、言われるのが落ちだろう。
心の中で一条のアホさ加減に呆れてると小野寺が
「と、ところで比企谷君もそういった事、な、なかったかな？」
と、上目使いで聞いてくる。
そういった事、とは十年前に女の子と約束がどうとかって事だろう。
「ひゃ、そんにゃ事なかったと思うじょ」
上目遣いの小野寺にドキドキしながら答える。
「そ、そっかぁ…あっ急に変な事聞いてゴメンね」
小野寺がそう言ったところでチャイムが鳴り、２人共席に着く。
目的の物は分かった。随分と特徴的な物だしすぐに見つかるだろう。

すぐに見つかる。

そう思ってた時期が僕にもありました。

全然見つかんねーよっ！1週間だぞ！1週間!!

ここまで探して見つかんねーとか、そのペンダント自体一条の妄想なんじゃないのかと

疑いたくなるレベル。もしくは先生とグルになって俺が探してるの見て

『あいつマジで探してる～w』『見つかるわけ無いのにね～』『マジウケるｗｗｗ』とか

笑ってんじゃないだろうな…

もういいよね。八幡頑張ったよ。ここまで働いたんだからもう一生働きたくない。

とか思いながらも探し続ける俺。やだ！俺の社蓄適正高すぎっ!!!

しかし本気で諦めるべきでは無いかと思っていると

「これか…？」

パッと見ただけでは見逃してしまいそうになる所で件のペンダントと思われる物を見つけた。
小野寺たちから聞いていた特徴とも一致する。
後はコレを一条に渡せばミッション・コンプリートだ。
明日でもいいかと思うがこういったのは早めに終わらしといた方がいいだろう。
さっさと渡して帰りにマッカンでも買って帰ろう…雨も降り出しそうだしな。

やっと見つけた…
小野寺も一緒にいるようだが、まぁ困ってる2人を見逃せなかったんだろう。
3人に近づき、声をかけようとした時

「うるっせぇな!!!!だったらもう探さなくていいからどっか行けよ!!!」

……なにこの状況。
やっぱ渡すの明日にしようかなぁ…誰も気付いてないようだし。

あ、雨降ってきた。傘取り行って帰るか。
「あ」
ん？どうやら小野寺が俺に気付いたようだ。
小野寺の声に反応してあとの２人も俺に気付く。
「ヒキタニ…」
「あ、ゾンビ」
ヒキタニって誰だよ。あと桐崎さん、ゾンビってやめてくれる？
まぁ、ここまで来たらさっさと渡して帰ろう。このまま雨に打たれてると風邪引くかもしれないし。
いや、風邪を引けば学校を休めるし、小町に看病してもらえるかもしれない…ってそうじゃない。
「ほら一条。無くしもんだぞ。大事なんだったらちゃんとしとけ。
あと、俺の名前はヒキガヤだから」
そう言って一条に向かってペンダントを放り投げる。
「お、おう…ってこれ!!」
驚く一条。
「アンタ、どうして…」

不思議そうな桐崎。
「俺はただ日原先生に頼まれて探してただけだ」
ホントは罰だけど。
「マジでサンキューな！比企谷！
いやーホント見つかって良かった…」
「別に気にすんな。その辺適当に探してたら見つけただけだ」
「比企谷君はこう言ってるけど本当は毎日帰る時に先生に落し物で届いてないか確認したり、
ゴミ捨て場まで探してくれてたんだよ」
ちょっと小野寺さん？なんであなたが俺の行動知ってるの？やだ、ストーカーかしら。
小野寺の言葉につい、恥ずかしくなりそっぽを向き頬を掻く。
「どうしてそこまでしてくたの？
それに私達アンタが探してるなんて知らなかったし、
探すなら一緒に探せば良かったのに」
あれ？知らなかったの？てっきり小野寺とかから聞いてると思ってたんだが。
「まぁ、お前たちに言ってないのはアレだ。アレがアレしてああなったからで…

そもそも探し物するのに一緒に同じ場所探しても効率悪いだろ。
それに妹に頼まれたからな」
「なに？アンタ、シスコンってやつ？」
「ばっかお前知らねーのか？千葉の兄妹ってのは総じて仲が良いんだよ。
それに可愛い妹の頼みを断るなんて千葉の兄として失格だろ」
「やっぱりシスコンじゃない」
そう言って笑う桐崎。

「とにかく助かった。見つけてくれてマジで感謝してる。
…あと、桐崎も。さっきは悪かった。
1週間一緒に探してくれてサンキューな」
「まぁ見つかって良かったじゃない。
とにかく探し物は見つかったんだからもう話しかけてこないでよね」
「ちょっ！桐崎さん!?」
「なっ！お前人が素直に感謝してるってのに…」

また言い争いを始める2人。

その間に入り場を収めようとする小野寺。
そんな3人は放っといて、もうホントに帰ろうと歩き出す。

「お」

雨は止んだようだ。

5

ペンダント探しの件が解決してから最初の土曜日。

俺は今、街に出ていた。

ペンダント探しに時間を取られ、その間に発売していた新刊を買いにきていた。

「お、あったあった。」

目的の物を発見し、他に目ぼしい物がないか書店内を物色していると人とぶつかってしまう。

「あ、すいません」

「いえ、こちらこそ…って、比企谷くん？」

俺の名前を呼ばれたので相手の顔を見る。

「ルリルリか」

あっ

「…ちょっとその「ルリルリ」って私のこと？

やめて貰える？気持ち悪いから」
ふぇぇこの子なんでこんなに怖いの？
「す、すみゃん。えっと…」
「はぁ…宮本よ」
「お、おう。悪かったな宮本。じゃ」
呆れる宮本に謝罪と別れを告げ、立ち去ろうとする。
「…ちょっと。
折角会ったんだし、少し話さない？
聞きたいこともあるし」
少し考えた後、引き止めてくる。
正直、意外だった。
もっと人間関係に冷めてるもんだと思ってたからな。
それに俺に聞きたいことがあるってのもだけど。
「いや、この後はアレがアレだから無理だ」
まぁ、だからといって話はしないけど
「アレってなによ。
予定が無いんだったら少しくらい良いじゃない」

「いやしかし…」
てか、女子と2人きりとか無理だから。
「イイカラ」
「…はい」
怖えよ。いや、マジで。

一先ず本を購入し、店を出る。
宮本はあまり時間を取らせるつもりはない、との事なので
家の方を目指し歩きながら話をする。
しばらくは他愛のない話をしていた。
お互い読書好きということで思ったより会話は途切れることは無かった。
「ところで比企谷くんって小咲のことどう思ってるの？」
「い、いきなりなんだよ。しかし小野寺ねぇ…
まぁ、優しいやつだと思うぞ。俺みたいなのにも話かけてくれたりするし
ノートを取ってくれたりするしな」
「そう…好きじゃないの？」

「ぶはっっ!!!」
思わず途中で購入したマックスコーヒーを噴出してしまう。
「そ、そんな事ないぞ」
「でも、比企谷くん中学のとき小咲のこと好きだったんじゃないの？」
やだこの子。なんでそんな昔の事知ってるのかしら。
「それは中学のときの話だろ。今はそんな事ない。
だいたいあの時の俺は話しかけてくれるってだけで
舞い上がるような単純な奴だったんだよ。
会話らしい会話をするようになったのは高校入ってからだしな」
中学のときは俺がドキドキしてまともに答えられなかったし。
今？今の俺は非モテ三原則
【（希望を）持たず
（心の隙を）作らず
（甘い話を）持ち込ませず】
を、心に刻んであるから
大丈夫だ、問題ない。いやコレ駄目なやつじゃね？
「もし、小咲があなたに告白したらどうする？」

「おい、その質問に一体なんの意味がある？」
　そもそもこのやり取りになんの意味があるというのだろうか
「別に無いけど。
　とにかくどうするの？付き合うの？断るの？」
　ここまで食い下がってくるとか、なんなの？キャラ違くない？
　意味が無いんだったら聞いて来るんじゃねーよ。
　けど、もしそんな事が起きたとしても…
「はっ、答える以前になんかの罰ゲームなのかと疑うだろ。
　そもそも、俺と小野寺じゃ無理だ。住んでる世界が違うんだからな」
「住んでる世界ってどういう事？」
　聞いてくるルリルリに分かりやすく説明する。
「いいか？小野寺はクラスカースト、もしくは校内カーストでもかなり上位にいる。
　容姿が良くて、誰にでも優しくて、男子だけじゃなく女子にも人気がある。
　それに比べて俺は間違いなく校内カーストの最底辺だ。いや、他の奴らに気付かれてないから最底辺以下かもな。
　そんな俺とじゃ、釣り合う釣り合わない以前の問題なんだよ」
「随分と暗い考え方ね…道のりは険しいわね」

一体何の道のりだろうか？

6

その後もしばらく話をしながら歩いていると
「君かわいいねー
どう？今ヒマ？
オレらとお茶しない？」
どうやらナンパのようだ。相手は
「あいにく人を待ってるんで。
ん？もやしは野菜か…」
桐崎のようだ。てかもやしってどうゆうこと？
農家の人でも待ってるのん？
「アレって桐崎さんじゃんない？」
「みたいだな」
「みたいだなって…助けなくていいの？」
「助けるっってもなぁ…早く帰りたいんだが」
桐崎とはクラスが同じだけだし、大して話をしたことがある訳じゃ無いし

助ける義理も無いんだが…

「はぁ…」

溜め息一つ。桐崎とチャラ男達に近付いてく。

ある程度近付いた所で携帯を耳に当て、チャラ男達に聞こえる位の声量で

「もしもし、警察ですか？

今、女性が目の前で拉致されそうになってるんですが…

はい、場所は」

チャラ男達がこちらに気付く。

「ちょっ！こいつ警察に連絡してやがる！」

「ちっ！さっさとずらがるぞ！」

そういい去っていくチャラ男達。

「格好悪いわね…」

後ろで宮本が何か言ってるが、あーあー聞こえない聞こえない。

かけてもいない携帯をしまい、再び歩き出す…

「ちょっと、アンタどういうつもり？」

事はできなかった。

桐崎がこちらに近付きながら言ってくる。

「不良から女の子助けて…助けて？アレって助けたっていえるかしら？」
「その疑問には私も同感よ。桐崎さん」
「み、宮本さん？珍しい組み合わせね」
「比企谷くんとはさっき本屋で偶然会ってね。
　話をしてたら桐崎さんを見かけたの」
「そうなんだ。それより、女の子助けてヒーロー気取り？」
「ヒーロー気取りだぁ？
　あんな何か起きてからしか行動できない奴らと一緒にしないで欲しい。
　別にお前を助けた訳じゃない。
　今日はなんか廻りに怖いお兄さん達が沢山いるからな
　何か騒ぎがあってそれに巻き込まれでもしたら帰りが遅くなっちまうだろ。
　だから俺は俺の為に行動したまでだ」
「どれだけ帰りたいのよ…
　それにしても確かにさっきからよく目にするわね」
「そ、そういえば今日はなんかやたら多いわね～…」
　顔いっぱいに汗をかき、目線を泳がせる桐崎。
　こいつ…何か知ってんのか？

「ところで桐崎さんはどうしてたの？」
「えっ！私は…」
言いづらそうにしてる所に
「おーい。ジュース買って来たぞって比企谷と宮本じゃん。何してんの？」
両手にジュースを持って一条がやってきた。

場所は変わって公園に来た俺達。

「ゴメンよハニー！まさか君がそんなピンチになってたとは知らなくて！」
「気にしないで！ダーリン！」
なぜか一条と桐崎の演劇を見せ付けられていた。
なにコレ？

先程一条が合流したところで立ち話もという事で、近場の公園に来ていた。

そこで俺と宮本が一緒にいる理由と、桐崎がナンパに引っかかってた事を説明した後、宮本が

「2人って付き合ってるの？」

と、聞いたところで急に演劇が始まったのである。

なんで演劇って思うかって？いや、そんなん一目見れば分かるでしょ。

お互い無理して笑ってるし、時々青筋浮かべてるし、なにより言葉が嘘くさい。

それで恋人を演じきれてるつもりなんだったらお笑い草だ。まだ幼稚園児のお遊戯会の方が見てて楽しいぞ。

「比企谷、どこ行くんだよ？」

「トイレだ、トイレ」

トイレにも行きたかったが、あの場から早く離れたかった。

一体どんな理由があるのか知らんが、見ていて気分が悪くなった。

あ～戻りたくない。

…このまま帰っても気付かれないんじゃね？

桐崎達がいる方とは反対側からトイレを出る。

「少年、少し良いだろうか？」

少年？顔を動かさず、目だけで廻りを見るが誰も居ない。もしかして俺のこと？

「聞こえているのか？君だ。そこの目の腐った少年」

もしかしなくても俺じゃね？目の腐った奴が他に居るなら見てみたい。

おそるおそる振り返ると

「やはりヒキガヤ君だったか」

「クロード…さん？」

銀色の髪をビシッと決め、スーツを着こなしたクロードさんがそこに居た。

7

クロード・リングハルト

この人との出会いは入学式前日。

その日は雨で、俺は図書館の帰り道の途中だった。

雨の中、傘を差さず鞄を傘代わりにしている女の子が小走りでいた。

交差点で車が気付かずに飛び出してしまった女の子の正面にいた俺が、その子を引っ張ったら代わりに俺が車の前に飛び出る形になってしまい、車に轢かれたのだ。

その日は雨という事もあって大したスピードでなかったのが幸いし、死亡事故にはならなかった。

その車に乗っていたのがクロードさんだったのだ。

入院中、何度か謝罪や見舞いに来てくれた。その時にアメリカンギャングの幹部であることを知った。

そういった経緯があり、なんだかんだ覚えてしまった。

「先程、見かけた時からもしやと思っていたよ。
君のような目をしてる奴はこちらの世界でも少ないからね」
マジか…ギャングの世界でも俺みたいな目って珍しいのね。
それより
「お嬢って…もしかして桐崎のことですか?」
前にボスの一人娘がいるとは聞いていたが
「そうだ。あの方こそが我がビーハイブ・ボスの一人娘、桐崎千棘お嬢様だ!!!」
お、おう急にテンション上がったな。どんだけ大好きなんだよ。
「それが一体!一体!!どう間違ったらあんな野蛮な蛮族のヤクザのクソガキと付き合う事になるのだ!!!」
いや、知らねーよ。てか、一条ってヤクザの息子だったんだな。
それにしてもキャラ変わりすぎだろ。俺の知ってる紳士なクロードさんはどこ?お願い!早く帰って来て!それで右手に持ってる物騒な物も早急にしまって下さい!
「失礼、取り乱してしまった」
ホントだよ。命の危機を感じたからな。

「それにしても先程お嬢を助けて頂き、ありがとう。
　今回といい、前回といい君には迷惑をかけてばかりで申し訳ない」
「迷惑だなんて、そんな事言わないで下さい。
　前回だって俺が勝手に飛び出したのが悪いですし、今回だってただ自分の為にやっただけですから」
「そうは言ってもこういった事はちゃんとケジメをつけなければならない。
　今日のことは今度なにかしらお礼をさせてもらうよ」
「別にお礼をして欲しいとか、そういったつもりは全く無いので気にしないで下さい」
「私も一組織で幹部を務める者だ。ちゃんとしなければ下の者に示しがつかない。
　だから、なにかさせてもらえないか？」
　一組織の幹部である人間がこんな事に…とも思うが、荒事のみならずこういった事がしっかりしているからこそ幹部なのだろう。結局ギャングなんだけど。
　しかし、どうしたものかと悩んでいると
「ちょっー！クロード!?こんなところでなにしてるのよ!!それにアンタも！」
　桐崎がやってきた。どうもトイレに来たら聞き覚えのある声が聞こえたので見に来たようだ。

「ふ～ん。それで2人は知り合いだったのね」
簡単に知り合った経緯を説明し、納得した様子の桐崎。
「それにしてもアンタって結構お人好しよね」
…こいつは何を言ってるのだろう？
思っていることが顔に出ていたのか、俺の顔を見てから話す。
「だってその事故の事もそうだけど、今回だって一応…その…助けてくれたし…
それに！この前のペンダント探しの時だって、自主的に始めた訳でもないのにゴミ漁りまでは普通しないわよ？」
事故の事は咄嗟の出来事だから何考えてたか覚えてないが、今日は早く帰りたかっただけだし、ペンダントの時は小町に言われたからなんだが…
取りあえず、全ては自分の為という事を説明しようと口開く前にクロードさんが
「そうです！お嬢！このような人物そうはいません！なのになぜ、お嬢はあんなサルと付き合っているのですか!!!」
「ダ、ダーリンにはダーリンの良い所があるのよ！」
2人が口論をはじめ、結局言い出すタイミングを逃してしまった。
取りあえずこの場からドロンする機会を窺っていると

「そ、そろそろ戻るわ。
じゃ、またね」
そう言って逃げ出すように去っていく桐崎。
どうやら分が悪くなったようだ。
「お待ちください！お嬢！……全く…」
それじゃ俺もそろそろ…と思ったがクロードさんに引き止められる。
「私はできるだけお嬢の近くで守りたんだが、いかんせん校内となると手が出し辛い。
だから、学校内で何かお嬢が困っていたら助けてあげて欲しい。
ヒキガヤ君にこういった事を頼むのはお門違いな事だと分かっている。
だから君の迷惑にならない範囲で構わない。お願いできないだろうか？」
この人は本当に桐崎の事が心配なんだろう。
少し、本当に少しだが桐崎が羨ましいと思った。
「まぁ…俺なんかで良ければ…」
そう答えクロードさんから顔を逸らし、桐崎達を見る。いつの間にか小野寺と会ったようだ。
「そうか、ありがとう」
クロードさんも桐崎達に目を向けて

「おっ、丁度良い。あの娘にも話を聞いてみるとするよ」
丁度良い？あの娘？小野寺のことか？気になるので聞いてみる。
「あの…小野寺の事知ってるんですか？」
「おや、君は知らなかったのかね？事故の時に助けた少女の姉だよ。
事故の件で挨拶に伺ったときに会ったんだ。
では、私はこれで失礼するよ。」
去っていくクロードさん。
それより、小野寺が事故の時に助けた子の姉？
小野寺は俺が助けたと知っていたのか？
……高校に通い始めてから、声をかけられる事が多くなった。
入院して入学が遅れた上、中学の時から友達のいない俺を気遣っているのかとも思っていたが…
クロードさんが居なくなってからも暫く動けずにいた。
そうしているうちに小野寺は去っていく。他の3人はまだ残っている。
その内の1人に声をかける。
「宮本、ちょっといいか？」
「どうしたの？」

桐崎と一条の2人とも別れ、再び宮本と2人になった。
「で、なに？」
「小野寺は居眠りしてた奴の為にノートを写し渡すって事、良くあるのか？」
「そうね…見た事ないわ。
きっと特別なんじゃない？貴方は」
なにか期待するように語りかけてくる。
「そうか…」

その後、特に会話も無く宮本と別れ、今は1人で帰宅中である。
先程のクロードさんの話と宮本の話について考える。
「きっと、そういうことなんだろうな…」

考えが纏まるのと同時に、何か冷めていくような感覚がした。

8

休日が終わり、学校が始まる。

時間は昼休み。

俺は今、屋上にいた。理由は桐崎と一条だ。

朝、教室に入るとやたら騒がしかった。

なんでも、この前の休日、桐崎と一条が出掛けてる所を目撃した奴が居たようだ。

なんで休みに一緒にいただけでデートしてた事になっちゃうんだよ、とも思ったが２人が演劇を始め、さらに周りがそれを信じてしまった。あの２人を見て、疑わしいと思わないのだろうか？

リア充の思考回路をアホらしく思いながらも、俺が宮本と一緒に居る所を目撃されなくて良かったと一安心。そんな話が出てきたらお互いに迷惑だしな。

そんなこんなで、昼休みになった今もあの２人の事でクラスで騒いでいる。

そういえば、何度か小野寺に話しかけられた。なぜか少し興奮気味だったが、対照的に俺は冷めていた。流すような対応をしていたら、宮本に睨まれた。訳が分からん。

朝から続くアホらしい空気が気味悪く、気分が悪くなるものを見せられたので、気分転換をしに屋上に来ていた。

今日は天気も良く風も心地良い。

横になりながら目を閉じる。

昼休みが終わるまで、少しだけ…

やっちまった…

目が覚めるとそこには、綺麗な夕日が写ってましたとさ。

また、日原先生に面倒事を頼まれなきゃいいが…

取りあえず荷物を取りに。教室に足を運ぶ。

教室内にはまだ誰かが居るようで、話し声が聞こえる。
まぁ、誰がどんな話してようが俺には関係ないけど。
教室内に入ると中に居たのは、小野寺と宮本だった。
「比企谷君…！」
小野寺が呟くのと同時に宮本が
「じゃーーーね小咲。
私急用があるからすぐ帰らなきゃ
バイビーーーー」
と言い残し、物凄い勢いで出て行った。
あんなに急ぐなんて、随分大事な用なんだろう。
かと思ったら、一度戻ってきて怖い顔でこちらを見たと思ったらまた出て行った。
大分忙しい奴だな。
「そ、そうだ！比企谷君、午後はどこ行ってたの？
朝から調子が悪そうだったから、先生には保健室じゃないかなって伝えといたよ」
急に宮本が退場した為か、ややテンパった様子で話す小野寺。

そんな小野寺を見て、俺は思わず微笑んでしまった。
「小野寺は、優しいよな」
「え!?そ、そんなことないよ!」
夕日の所為か、顔を赤くして否定する。
なぜ否定されたのか全然分からんが、それでも小野寺は優しいと思う。だから、きちんと言っておくべきだった。
「あのさ、別に俺の事なら気にする必要ないぞ。小野寺の妹、助けたのは偶然だし、それにあの事故がなくても俺、多分ボッチだったし。小野寺が気に病む必要全くなし」
「ひ、比企谷君、知ってたの?」
目を見開き、驚きに満ちた顔で俺を見つめる。
「いや、知らなかったけど、この前クロードさんに会ってな。そん時に初めて知った」
「そっか…」
そう呟き顔を伏せる小野寺。
「悪いな、逆に変な気遣わせたみたいで。まぁ、でもこれからはもう気にしなくていい。俺がボッチなのもそもそも俺自身が理由だし事故は関係ない。負い目を感じる必要も同情する必要もない。……気にして優しくしてんなら、そんなのはやめろ」
ほんの僅か、自分の語気が荒くなったのを自覚した。ああ、いかんな。何をカリカリ

してるんだ俺は。こんなのなんでもないことなのに。
俺は苛立ちを誤魔化すようにがりがり頭を掻いてしまう。さっきから流れているこの沈黙が気まずい。
初めて沈黙を苦手に思った。
「まぁ、その、なんだ…」
とりあえず口は開きはするものの、言うべき言葉が見つからず、具体的な事が出てこない。
お互い言葉に詰まると、小野寺が顔を伏せたまま話す。
「あ、あのね。別にそういうつもりじゃ…ホントに…そういうんじゃなくて…」
俯いているせいで表情は見えない。ただか細い声がちょっと震えている。
「そういうのじゃ、ないよ……そういうのじゃ、ないのに……」
小さな声で小野寺は言う。どこまでも優しい小野寺小咲は、多分最後まで優しい。
真実が残酷だというなら、きっと嘘は優しいのだろう。
だから、優しさは嘘だ。
「あー、まぁなｎ『ガッシャァァァン!!!』！」
「！」
声をかけようと思ったら、突如ガラスが割れ、お互い顔を見合わせる。が、すぐに小

野寺は顔を伏せてしまう。
外で割ってしまったであろう人物達の声が聞こえるが、何を話しているかは耳に入ってこない。
「…先生呼んでくる。ガラスは危ないから触んない方が良い。……じゃ」
そう言って教室から出て行く。
返事はなかった。

誰もいない廊下を、1人歩く。
それぞれ部活に励んだり、友達などと遊びに行ってるのだろう。けれど、俺には関係ない。
俺、騒がしいの嫌いだしな。
あと、優しい女の子も、嫌いだ。

ほんの一言交わせば気になるし、メールが行き交えば心がざわつく。電話なんてかかってきた日には着信履歴を見てつい頬が緩む。

だが、知っている。それが優しさだという事を。俺に優しい人間はほかの人間にも優しくて、そのことをつい忘れてしまいそうになる。

別に鈍感なわけじゃない。むしろ敏感だ。それどころか過敏ですらある。そのせいでアレルギー反応を起こしてしまう。

既にそのパターンは一度味わっている。訓練されたボッチは2度も同じ手に引っかかったりしない。じゃんけんで負けた罰ゲームの告白も、女子が代筆した男子からの偽のラブレターも俺には通じない。百戦錬磨の強者なのだ。負ける事に関しては俺が最強。

いつだって期待して、いつも勘違いして、いつからか希望を持つのはやめた。

だから、いつまでも、優しい女の子は嫌いだ。

9

翌日

教室に入り、席に向かう。

途中、小野寺小咲に会ったが戸惑いの表情を浮かべ、顔を逸らす。

「うす…」

「…お、おはよう」

それ以降、会話をすることなく、席に着く。

これで完全にリセットできただろう。

リセットする事で俺は心の平穏を取り戻し、小野寺は負い目から解放され元のリア充ライフへと回帰する。選択肢として間違っちゃいないはずだ。いや、むしろ正しい。

大体、小野寺の妹を助けたのはたまたま偶然だったのだ。そんなたまたま偶然をいつまでも気に病む必要はないし、俺の入学ボッチスタートという必然はなおさら気にする必要はない。

だから、この件はこれで終わり。リセットしてまたお互いの日常を過ごせばいい。
人生はリセットできないが、人間関係はリセットできる。ソースは俺。
完成系ボッチにたどり着いた今、もはや敵なし。

昼休み

ベストプレイスで昼飯を食おうと、教室を出ようとしたが行く手を阻まれた。
「比企谷くん、話があるんだけど」
宮本である。
「…なんの用だ？」
「聞かなくても分かるんじゃないの？」
「わかんねぇな。用があるんなら早くしてくれ。パンが売り切れちまうからな」
「…本気で言ってるの？」
なんでそんな怖い顔してるんだこいつは

「本気も本気だ。皆目検討もつかん。もういいか？」
横を通り抜けようとしたら
「ちょっと来なさい」
そういって俺の制服の襟を引っ張る宮本。
やめて！襟が伸びちゃう！

所変わって屋上

結局、引っ張られたまま屋上まで連れて来られた。途中、離してくれと言っても離してくれない為、見られてめっちゃ恥ずかしかった。

「で、一体何の用だ？」
「小咲のことよ。昨日の帰り道、あの子泣きそうな顔してた。何があったのか聞いても答えてくれなかったわ。それに朝も様子が変だったけど貴方に会った時、さらにおかし

かった。昨日の放課後、一体何が、いや何をしたの？」
なんで俺が何かした前提で話が進んでるんですかねぇ…
「昨日は、ただ話をして別れた。ただそんだけだ」
「じゃぁ、なんの話をしたの？」
「なぜお前に話す必要がある。
小野寺は話さなかったんだろ。だったら俺も話すことは無い」
「だけど…何も知らないままじゃ何も出来ないじゃない」
そう言って俯く宮本。
知らないまま…ね。知ったところでどうにか出来るなんてただ思い上がりだ。
俯く宮本の横を抜け、屋上を出ようと扉を開ける。
「「あ」」
桐崎と一条と舞子の3人が屋上を除くような体制で固まっている。
「い、いや～、あんな風に教室から引き摺られて出て行ったら気になるもんでして…」
聞いても無いのに言い訳するように話す一条。
「盗み聞きするような真似したのは悪かったよ。でも、話してくれてもいいんじゃない？
これだけの人数がいれば、何かいい案が出るかもよ？」

提案してくるのは舞子。
いい案だと？
「お前ら一体何を勘違いをしてるのかは知らんが、何も解決して貰うような事は無い。
それにもうめんどくさいから言うが、昨日は俺と小野寺の関係をあるべき形に戻しただけだ。お前らが気にするような事じゃない」
「あるべき形って…どうゆう事よ」
宮本が再起動したようで、詳細を求めてくる。もう全部話してしまった方がこの場から早く離脱できるかもしれん。別に隠すような話でもないし。
結局、昨日の出来事を説明することにした。

「…てな感じだ」
一通り説明を終える。
「やっちゃったねぇ…」
額に手を当て、空を仰ぐ舞子
「流石にそれは…」
目線を伏せる桐崎

「つまり…？」
いまいちよく分かってない様子の一条
そして
「なによ…それ」
俯き、震えている宮本
「貴方、本気で小咲が同情だとか負い目を感じてるだなんて思ってるの？
そんな訳ないじゃない！あの子が一体どんな気持ちで貴方と接していたか本当に分からないの!?」
珍しく声を大にして訴えてくる。
「あぁ、わかんねぇな」
言葉にしないで相手にわかってもらおうだなんて、ただの傲慢だ。
「っ!!!」
パァンと乾いた音が響く。宮本に頬を叩かれた。
「宮本！」
「楽、今回は比企谷が悪い」
「でも！」
「確かに、今回は私もアイツが悪いと思うわ」

「桐崎まで…」

その後、一条も他の奴らも何もいう事はなく、そして昼休みを終えるチャイムが鳴り響く。

全員無言のまま、屋上から出て行く。そして最後に俺だけが残った。

「昼飯食い損ねたじゃねぇか」

叩かれた頬を押さえながら呟く。

ただ頬を叩かれただけのはずなのになぜか、心が痛んだ気がした。

１０

放課後

６時限目の終了を知らせるチャイムが鳴るのと同時に、
「今日は用事があるから早く帰らなきゃ…」
と言い、さっさと教室から出て行く小野寺。
小野寺が出て行った後に、宮本が親の仇を見るような目で睨んできたが、小野寺を追って教室から出て行く。

結局あの後、昼飯抜きのまま午後の授業を受けた。食事後の睡魔に襲われることは無かったが、空腹感が半端なかった。なんとかマッカンを飲んで凌いだが、やはり何か腹に入れたい。帰りにどっか寄って食うか。
どこに行こうか悩みながら教室を出て、駐輪場へと向かう。
自転車に乗り、校門を出たところで忘れ物に気付く。明日の授業で提出しなければな

らない課題だ。正直、今から教室に戻るのも面倒だし飯も食いたい。しかし、忘れた課題を見せてくれるような親しい人間は居ない。

「しょうがねーな」

来た道を引き返し、教室に向かう。

戻ってきた教室には、桐崎と一条が残っていてた。

２人は俺が教室に入ってきたことに気付かず、やれ友達の作り方が分からないからノート作っただの、やれ桐崎がクロードさんの所為で友達を作るのに苦労をしたという話をしていた。その話を聞いた一条が吹き出している。恐らくヤクザの息子という事で似た経験をしたことがあるのだろう。

正直、前半部分は俺にも当てはまる部分はあったなぁ…

結局今じゃ絶対に許さないノートになってるけど。

その後も桐崎の話は続き

「普通に友達作って、普通の暮らしがしてみたかった。

日本に来れば、みんなが私がギャングの娘だって知らないからチャンスだと思った…

でも…やっぱり上手くいかなくて…」
「ふっ」
そこまで聞いてつい笑ってしまった。
笑い声を聞いて２人が俺を見る。
「!?」
２人とも驚愕の表情を浮かべている。
「アンタ、一体いつから…
というか、何がおかしいのよ!!」
桐崎が一足先に復帰し、俺に喰ってかかる。
「いつからと聞かれれば、ついさっきからだが…
それで、なにがおかしいのかって?そりゃ、お前が日本に過度な期待をしてるからだ」
「なっ!期待することの何がおかしいってのよ!」
俺を睨むように聞いてくる桐崎。怖いからやめて欲しいんだが…
桐崎から目を逸らしながらもなんとか口を開く。
「お前は、日本に来ればチャンスだと思ったんだよな。でもな環境が変わったからといってもお前自身が変わるわけじゃない。日本に来れば何かが変わるってのは幻想だ。夢を見るのはやめておけ」

なんで、人間ってのは環境の変化に一喜一憂してしまうんだろうか。
学生ならば進級や進学などしてクラス替えとかは必ず訪れるイベントである。
新しく友達ができるかな?とか、上手くクラスに馴染めなかったらどうしよう!?とかさ。
毎回そういったイベントがある度に心踊ってた時期が俺にもありました。
結局上手く行かずにボッチだけど。べ、別に友達が欲しかった訳じゃないんだからねっ!
…キモイな、やめよう。
「な、何でアンタにそんな事言われなきゃならないのよ!」
しょうがない。ここはひとつボッチの先輩としてのアドバイスをしてやろう。
「…ひとつ、俺の友達の友達の話をしてやろう」
「え?比企谷に友達って…あっ」
「はぁ?いきなり何よ?てかアンタ友達いないでしょ」
おい、桐崎!折角一条が濁したのをドストレートでぶち抜いてきやがって!!
俺じゃなかったら泣いて、引きこもるレベルだぞ!
心の中で桐崎にツコッミを入れながらも話をなんとか始める。
「まぁ聞け。

そいつは、小学生の頃周りに上手く馴染めてなかったんだ。所謂ボッチってやつだ。
でも、中学生になれば何かかが変わると、何もしなくたって勝手に友達が出来ると信じていた。
結局、何もしないでいたおｒ…そいつは一人ぼっちのままだった。
でもある時にそいつは気付いたんだ。今の受身の状態では駄目だと。
それからそいつはとにかく様々な努力をした。
流行の芸人やドラマ、遊びについて必死になって学んだ。笑顔の浮かべ方や髪型だって勉強した。
でも、駄目だった。時すでに遅しってやつでな、クラスの中で俺は既にボッチとして認識されていた。
それに小学生時代の噂まで流れてきて、それがさらに俺のボッチ道に拍車をかけたんだ。……噂を流し始めた中岡くん、絶対に許さん」
「…結局アンタの話じゃない」
「いや!?これは友達の友達の話でだな…」
「いやもう最後のほう俺って言っちゃってたぞ…」
おかしいな、俺だとバレないように話してた筈なんだが…
「で、結局アンタは何が言いたかったわけ?」

「俺が言いたいのは、立場が確立してそっから悪い噂が入ってくればボッチまっしぐらだって事だよ。
ただでさえ今のお前の立場は微妙だってのに」
「ちょっ、比企谷!!それは…」
「なに?どうゆう事よ…」
一条がそれは駄目だと言いたげな顔をして、桐崎が訳がわからないという顔で俺を見てくるが、こういうのは遅かれ早かれ本人の耳に入ってくるものなんだから早めに教えてやった方が良いに決まっている。
「知らないんだったら教えてやる。お前は転校生だ。しかもスタイル抜群の美人で帰国子女と来たもんだ。
そりゃ注目も浴びるだろうし、仲良くしようとする奴も大勢いるだろう。
だが、お前自身、親が原因か知らんが無意識に壁を作っている。一条にはそれがないが、他の奴らは薄々気付いてるぞ、避けられてるって。一部女子の中じゃ周りを見下してるんじゃないかって話があるくらいだ。そんな状況が続いてる中でもし親がギャングだってバレテみろ。
そうなればどうなるかお前だってわかるだろ」
「そ、そんなこと…」

「お前がどう思っていようが評価するのは周りの人間だ」
「……」
　顔色を悪くしつつ黙り込む桐崎。
「比企谷っ!!なにもそこまで言わなくたっていいだろっ！」
「だけど…だけどな、状況は違えど似たような境遇を過ごしてきた奴が、ここには居る」
「え？」
「友達を作る為のノート作ってんだろ？一条もそれくらいは作ったことあるみたいだしな。
　手伝って貰えばいいじゃねーの？まぁ、一条次第だけど」
　そういって一条の方を見る。
「え、あ、うん…まぁ、お前は嫌な奴だけど、お前の気持ちは少しは分かるからな。
　…手伝ってやってもいいぜ？そのノート作るの」
　男のツンデレとか誰得だよ。
「…あーそう!!
　そこまで言うなら手伝わせてあげなくもないけど!?」
「ホンットかわいくないよな、お前って…」
　そのまま2人が言い争いを始めるが、俺にはもう関係がない。

これが上手く行くかどうかは本人次第だろ。

一先ず、こんなもんでどうですかね。クロードさん。

「あ、ちょっと待ちなさいよ！」

教室から出て行こうとした俺を、引き止めるのは桐崎の声。

「…なんだ？」

正直、もう俺居なくても良いと思うんだが…
「あの、その、えっと…ぁ、　　」
顔を真っ赤にして何かを言ったらしい。
「すまん、なんて言ったのか聞き取れなかったんだが…」
「あーーー!もう、なんでもないわよ!」
そこまで言って神妙な顔つきになった。コロコロ表情が変わるやつだな。
「ところでさ、アンタいいの?」
一体、何の事だが分からずつい聞き返してしまう。
「なんの事だ?」
「小野寺さんとの事…」
それを聞いて、一瞬顔が強張った気がした。
「…昼にも言ったが、俺と小野寺の関係は正しい形に戻っただけだ」
「でも、ホントにこのままでいいの…?」
小さく聞こえた桐崎の声を聞こえないフリをして教室を後にした。

どっか寄ってく気分でもなくなったし、まっすぐ帰るか。

11

桐崎と一条との騒動から数日が経過した。
あれからも俺と小野寺の関係は正しい形のままである。
お互いに話かける事をせず、挨拶を交わす程度。なぜか宮本から冷たい視線を感じるが、俺にとっては慣れしたんだモノ。今更、気にするような事じゃない。
そして、桐崎と舞子からはなんとも言いがたい視線を感じるが、何か言ってくるわけでもないから無視である。

うん、ボッチ万歳

そんなこんなで今日は調理実習という（リア充にとっては一大イベントの）日である。
お題はケーキ。

…ケーキってなんだよ。調理実習でやるようなお題か？こういうのって普通は「ご飯、味噌汁、おかず１品」とかじゃないの？まぁ、午後からだから食後のデザート位のつもりなんだろうが…なんでケーキなんだよ。おかげでリア充共が浮き足立っちゃってんじゃん。

さらには、そのケーキを好きな奴に渡すという流れが発生しているようで、クラス中の男子がそわそわしててまるでバレンタインのような空気になっている。

俺？貰える筈がないって分かってて無駄にそわそわするわけないじゃん。

そして、ついに調理実習の時間がやってきた。

はやくも一部の男子が女子に交渉を仕掛けてるようだ。

特に人気があるのは…やはりというかなんというか、小野寺だった。

その光景を見て思う事は、俺の行動に間違いはなかった、という事だけだ。他に何か思う所があるわけじゃない。

……俺は一体、誰に言い訳してるのか。

今までの思考を追い出して、ケーキ作りに専念する。

もちろん、愛する小町の為に全力で望む所存だ。

ケーキ作りもそろそろ終盤である。
時折、桐崎と一条が何か騒いでいたが、無視である。
後は、飾り付けをして、ラッピングをすれば…よし、完成だ。
フフ。小町の喜ぶ顔が…浮かばねぇ…
まぁ、今日の授業はコレで終わりだし、後は実際に見て確かめればいいか。
使った調理器具等の洗い物を済ませて教室を出た所で一人の少女と目が合う。
「…あ」
小野寺だ。
「比企谷君…」
そう言って顔を伏せてしまった。
「…おう」
名前を呼ばれたので、つい立ち止まったが特に用はない。
小野寺も顔を伏せたまま。
さっさと立ち去ればいいのにどうしてか、動くことが出来ずにいた。
「あ、あの…」

時間的には1分にも満たない、しかし体感的には随分長い沈黙を破ったのは小野寺だった。

「あ、あれから色々考えたり、色んな人と相談して…

やっぱり今のままじゃ嫌だなって思ったんだ。

だからね……」

そこまで話して黙ってしまったが、俺は何も言わずに唯、続きを待っていた。

「だから、また新しく始められないかなって思うんだ。

事故で助けられた女の子の姉の私と、それを助けた比企谷君の関係はこれでお終い。

比企谷君は事故があったからって、ボッチだからなんて言うかもしれない。

でもそんなのは関係ないんだよ。

これからは、なんでもない私と、なんでもない比企谷君で仲良くしていきたいんだ。」

顔を真っ赤にしながら、でも真っ直ぐ俺を見てくる小野寺。

「嫌…かな…？」

事故の件も、ボッチも関係ない、なんでもない俺と仲良くしたい…か。

正直、色々言いたい事や聞きたい事はある。でも、ここで言うのは違う気がする。だ

から…

「ん…まぁ…あれだ。いや、え～っと……お、小野寺が嫌じゃないんなら…別に…」

かぁ～！なんか知らんがクソ恥ずかしい!!!

多分、今の俺の顔は、さっきの小野寺並みに赤くなってるんだろう。

「ほ、ほんとに？…よかったぁ…

あ！そうだ。これ、良かったら食べて？」

そういって差し出された小さなケーキ。

「余った生地で作ってあったんだ。どうしようかと思ってたんだ。

折角だし、比企谷君に食べてほしいな。」

「お、おう。サンキューな」

余ったやつならしょうがないよな、うん。

「あっ！見つけた！」

差し出されたケーキを受け取った所で新たに声がかかった。

「アンタ、教室にいないと思ったらこんな所に…って、小野寺さん!?

…もしかして、お邪魔だった？」

現れたのは片手に何か持った桐崎だった。

「う、ううん。お邪魔だなんて、そんな事ないよ。

桐崎さんはどうしたの？比企谷君に用事？」
「まぁ、そうなんだけど…よかったわね、仲直りできたみたいで」
「えへへ…」
俺たちを見て、微笑む桐崎と嬉しそうに笑う小野寺。
その光景を見て、少しばかりドキリとしたが、顔に出さずに桐崎に問う。
「で、一体俺に何の用があるんだ？」
「そ、そうだった！
はいコレ、アンタにあげる」
そうって差し出されたのは……なんだコレ？炭？
「あの～、桐崎さん。つかぬ事をお聞きしますが、コレは一体…？」
「うっ…ケ、ケーキよ」
「嘘だろ。世界中のケーキ職人に謝れよ」
「ちょ、比企谷君!?」
あっ、ヤベ、死んだ。
「ふ、ふん！見た目はアレだけど、味はおいしいって評判なんだからね!!」
てっきり殺人的ストレートが飛んでくると思いきや、返ってきたのは意外にも自信ありげな言葉だった。正直、進んで食べたいとは思わないが、ここまで自信満々に言われ

ると本当に美味いのかもしれない。
「じゃ、じゃぁ…」
恐る恐るケーキを口に運ぶ。
小野寺と桐崎が不安そうにコチラを見てくる。
おい桐崎、今更そんな顔するんじゃねぇ。やっぱやめようかなって思っちゃうだろ。
「……うめぇ」
「でしょ!?クラスのみんなにも好評だったんだし、当然よね！」
見た目がアレなのにどういう訳かめちゃくちゃ美味い。どう作ったらこうなるのかとか、聞きたいが、今一番聞きたいのはそれじゃない。
「なぁ、なんで桐崎は俺にコレを？」
なぜ桐崎が俺にケーキをくれるのか、それが気になっていた。わざわざ探してまでだ。
「うぅ～…お、お礼よ！お礼の気持ち!!!
なんだかんだアンタには何回か世話になってるし…」
別に感謝される様な事をしたつもりもないんだが、まぁケーキに罪はないし、お礼というならありがたく受け取っておこう。そう思いながらもう一口、ケーキを口に運ぶ。

その後、桐崎と小野寺が少し会話して桐崎は教室内へと戻っていった。
そして、小野寺から貰ったケーキを食べたのだが……
まぁ、人間誰しも苦手な事ってあるよねって事で、味に関してはノーコメントで

12

調理実習のあった日から数日。
後日、宮本達から謝罪の様なものを受けた。屋上での事やその後の対応の事を言われたが、俺にとっちゃ慣れた物だし気にする事じゃないと返したら
「やっぱり比企谷くんは、変わってるわね。
でも、だからこそ…」
とか、言われた。訳が分からないよ。

小野寺との関係が変化したからと言って、劇的に日常が変化することも無かった。
以前に比べると会話の回数が増えたり、宮本ともより話すようになったりした。
あと、なぜか桐崎に話しかけられる事も増え、その流れか知らんが一条やマイマイとも話すことが増えた。
以前に比べれば少々騒がしくなったが、まぁその内あいつらも飽きてくるだろうからそれまで付き合ってやるか。

「「「「おじゃましま～す」」」」

「……ただいま」

「…………ほぇ？」

ここは俺の家。そして今、俺の目の前ではマイラブリーエンジェル小町が可愛らしいお口をだらしなく開けてまるで信じられないような光景を目にしたような表情を浮かべている。

そして、俺の後ろには小野寺、宮本、桐崎、一条、マイマイの５人が立っている。付き合ってやるかとは思ったけど、こんなプライベートまで付き合うつもりは毛頭無かったぞ……!!!

ホント、どうしてこうなった。

～～～～～～～～～～～～～～～～

遡る事、数十分前

本日の授業も全て終わり、家に帰る準備をしながら帰ってから何をしようかなぁ…

と、

考えている時だった。

「比企谷くん！」

俺の目の前に急に現れたのは仁王立ちでドンと構えている宮本だった。

なぜか分からないが猛烈に嫌な予感がしつつも名前を呼ばれたからには動くに動けず、

一先ず後ろであわあわしてる小野寺に癒されていた。

「…なんの用だ？」

取り合えず返事は返しておく。

ここ数日で発見したが、こいつの場合返事をしないと強行手段をとる事がある為、残念ながら返事をしておく事が一番いいのだ。

「…今日私達、あなたの部屋で勉強会開きたいんだけど構わない？」

「……はぁ？」

こいつは、一体、何を、言って、いるのか？

「どうなの？」

ハッ！急な事で若干思考が固まっちまったが、一旦落ち着こう。

状況を整理するとなんだ？ようは小野寺と宮本が俺ん家で勉強ををしたいと…？

「いやいやいや、無理だから」
「ハァ？」
怖っ！めっちゃ怖いよこの子！めっちゃ覇気みたいなの発してるんですけどぉ!?
やっぱりルリルリは覇気の使い手だったのか…
「…理由を聞いても、良いかしら？」
「い、いやぁア「因みにアレがアレでアレだからなんて意味不明な理由じゃないでしょうね？」レが…」
俺の思考が先読みされてる…だと…？
考えろ！考えるんだ俺！この状況を打破する方法を…！
「いや、ア、アレだ。今日はかまくらの餌を買って帰らないといけないから…」
「いいわ、その買い物付き合うわよ」
駄目だったよ。
いや、まだ諦めるには早い！
……
……
……
……

…

「はぁ…わかったよ。好きにしろ」

その後、何度か抵抗を試みたがどれも無駄に終わり結局、俺ん家での勉強会を許してしまったのだった。

「なになに〜？面白そうな話してんじゃん。

なぁ比企谷、それ俺たちも行っていい？」

とまぁ、マイマイが会話に入ってきて結局一条と桐崎も追加して計５人が我が家に訪問する流れになったのであった。

「あ、因みに妹に色目使おうモンならブッ飛ばすからな」

「「怖ぇよ!!!」」

マイマイと一条には釘を刺しといた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

そうして今現在、まだ小町はフリーズしている。

「ハッー！小町疲れてるのかな…

そうだよね、お兄ちゃんがお友達を家に連れて来るわけないもんね。

夕飯の準備するまでちょっと休もう」

あらやだ小町ちゃんてばあまりの事に現実逃避しちゃってるわ。
だがわかる、わかるぞその気持ち。俺だって今の状況が受け入れられてないんだから。
なにしろ同級生の、しかも女子を家に連れて来る事になろうとは思ってもいなかったんだ。
俺たち兄妹が現実を受け入れられずにいると、後ろから制服の袖をチョイチョイと引かれた。
そして後ろを振り向けば、なぜか三者三様ならぬ五者五様（？）の驚きを表していた。
「なに、お前らどしたの？」
「え…っと、もしかしてあの子が…アンタの妹さん？」
袖を引っ張ってきた桐崎が皆を代表するかのように俺に問うてきた。
「おう、俺の自慢の可愛い可愛い天使だ」
「う、嘘よ！どうしてあんな可愛い子がアンタの妹なのよ！ぜんっぜん似てないじゃない!!」
ほっとけ。
「なぁ、比企谷…今度からお兄さんと呼んでもい「フンッ！」ブベラッ!!
ま、待て!!冗談だ!!」

「なぁ、知ってるか？世の中には冗談でも口にしてはいけない事があるという事を…」
なんて俺たちが騒いでいると小町は、現実だとういう事を実感し始めたのか、俺に聞いてくる。
「えっと、もしかしてお兄ちゃん…本物？」
「なに言ってんだ、正真正銘お前のお兄ちゃんだぞ。
そして今お前の目の前の光景も…誠に遺憾だが本物だ」
「う、うそ…今まで一人も家に連れて来る事が出来なかったお兄ちゃんが？
いきなり５人の友達を!?しかも内３人は女の子ってだけでもビックリなのに３人とも美人さんだなんて…う、うぅ、良かったねぇ、お兄ちゃん。今夜はお赤飯だね」
「いやいや、勘違いしてるからね？友達じゃないよ？ただのクラスメイトだからね？
あと赤飯は炊くんじゃねぇ」
いつもの嘘泣きにも見えるが、若干マジで泣いている様にも見える。
いや、驚くのは分かるがそこまでか？
「っと、そうでした。皆さん、始めまして。いつも愚兄がお世話になっております。
妹の比企谷小町です！よろしくお願いします」

こうして俺の妹はクラスメイト達との邂逅を果たした。

これから勉強するってのになんかどっと疲れた。

13

あの後、各々自己紹介を済ませ、勉強会を始める事ができた。
俺の部屋だと6人は流石に狭いのでリビングで行う事にした。
「取り合えず適当に座っといてくれ。飲み物準備してくるから」
「あ…！私も手伝うよ…！」
「お、おう…。サンキューな」
＊＊＊
「ふむふむ…小咲さんはほぼ確定と見ました」
「あら、わかるの？」
「はい！…と、いっても殆ど勘なんですけどね。
ちなみに千棘さんは、気になっている位で、るりさんは興味が無くはない位ですかね！」
「ふ～ん…」
「ちょ、ちょっとコマチちゃん?!あんまり適当な事言わないでくれる!?
誰があんなゾンビなんか気になってるっていうの!?」

「なになに～、なんの話してんの～?俺もまぜてよ～」

＊＊＊

飲み物を準備してる間に小町が桐崎達となにか話をしていたようだが…

あんまり余計な事を話してなきゃいいが…

「小町、これから勉強会だからあんまり邪魔すんなよ」

「は～い、それじゃ小町は部屋に戻ってるから、何かあったら呼んでね～」

「よし、じゃぁ始めるか」

俺は開会の合図を出すのと同時にイヤホンを取り出し、耳に嵌めた。

それ見た桐崎が驚愕の表情をした。

「はぁ!?なんで音楽聴くのよ!」

「や、勉強のときは音楽聴くだろ。雑音消すために」

「そうじゃないわよ!あたしがやってみたい勉強会ってこうじゃない!!」

ばんばんと机を叩いて激しく抗議する桐崎。

他の４人もそれぞれの表情を浮かべている。

苦笑いのような表情の小野寺。

無表情の宮本…だが、威圧感がハンパない。
「なるほど…」などと言いながら頷く一条。
そんな光景を見ながら爆笑しているマイマイ。
周りのリアクションを一瞥し、とりあえず桐崎に問いかける。
「…じゃあ、どんなのが勉強会なんだ？」
「えっと…出題範囲確認したり、わからないとこ質問したり、…まぁ、休憩も挟んで、あとは相談したり、それから、情報交換したり。たまには…雑談もしたいかなぁ？」
「ただ喋ってるだけじゃねぇか…。しかも最後の奴なんか願望かよ」
「しょ、しょうがないじゃない！今まで友達とかと勉強会なんて初めてなんだから…」
さらっと涙を誘うような発言をしながら照れくさそうな桐崎。
それを見てか、はたまた一通り笑い終えたからかマイマイが言う。
「まぁまぁ、取り合えず比企谷はイヤホン外してくれればそれでいいから」
俺が嫌そうな顔をすると同時、マイマイの後ろの宮本が見えた。
……
しぶしぶといった風にイヤホンを外す。
べ、別に宮本が怖かったとかそんなんじゃないんだからねっ！

そんなこんなで勉強会は進み時間は経過していく。
ふと周りの様子を窺ってみる。桐崎と意外とマイマイはそこそこ集中しているようだ。一条はチラチラと小野寺を横目で様子を窺っている。そしてその小野寺はちょうど宮本に質問をしているところだった。
「…ねぇるりちゃん、ここ解ける？」
「んー？」
そこで宮本と目が合う。
しばらくの沈黙ののち
「ねぇ比企谷くん。ここ小咲に教えてあげて欲しいんだけど」
「!!?　るっ…!!るるるるりちゃ…」
「あーゴメン私これ全然ワカンナイから…」
「…この前もっと難しそうなの解いてたじゃ…」
「いいから行け。そして二度と戻るな」
２人の会話を聞き、宮本にドン引きする。

「よ…よろしくお願いします…。
と…解ける…？」
小野寺との関係が多少変化したが、まだお互いぎこちない感じが無い訳ではない。
とりあえず、なぜか一条から感じる恨みがましい視線を無視して問題をみる。
「ふむ…。俺、理数系は捨ててるからよくわからん」
宮本のいる方からなにか途轍もなくプレッシャーを感じるが、そんなもん無視だ、無視。
「あーそれ？
先にαに代入しないと解けないわよ？」
「なんだ、桐崎。この問題わかるのか？
てか、自分の分はどうした？」
「もう終わった」
「…お前、向こうでの成績どんなんだった？」
「だいたいAかな」
ほう…。容姿端麗頭脳明晰の帰国子女。それでいて親はギャング。
こいつどんだけキャラ付けすりゃ気が済むんだよ…。
「ねぇ小野寺さん！勉強だったら私が教えようか？」

「え？」
俺が桐崎のキャラに関して唸っている内に聞かれた問題をさくさく解いていき、一条と桐崎がなにかバチバチやり合っている。
…こいつら仮にも付き合ってる設定忘れてんのか？
「ねーねー小野寺さん。
小野寺さんは好きな人とかいないの？」
小野寺と一条が噴出しているが、俺個人としても興味のある話である。
別に「お。小野寺の好きな人…？お、俺とかだったりしないかなぁ」とかいう思春期男子特有の淡い妄想などではない。
俺なんかと仲良くしたいと小野寺は言った。
正直、嬉しかった。だが、やはりその言葉を心から信用する事は俺には出来ていない。
嘘を吐いている訳ではないというのは分かっている。これは俺の気持ちの問題なんだと分かっている。
だがもし、小野寺にちゃんと好きな人がいるというのなら、俺なんかに時間を割かないで好きな人との時間を作って欲しいと思うから。
小野寺の答えを待つ。
「わ…私は今はそういう人は…」

…まぁ、それもそうか。
男子がいる前でおいそれと言えるわけがない。
「…そっかー。私もまだそういう人いなくてさー。
早く素敵な恋とかしてみたいんだけどねー…」
一瞬、時間が止まった…様な空気が漂った。
こいつ…本気で付き合ってる設定忘れてやがるな。
思い出したようにジョークだと言い出し、一条も即興で合わせる。
周りは疑ってない様子だが…マイマイの奴は多分気付いてるな。
「なぁなぁ桐崎さん。俺もちょっち聞いていい？」
「へ？」
「お前らぶっちゃけどこまで行ってんの？」
本当イイ性格してるな…。単純に気なって聞いてる様にも見えるが、俺からしたら完全に楽しんでるようにしか見えん。
あっ、一条に連れて行かれた。
……どうしてくれんだこの状況。

結局、なんとも言えない雰囲気に包まれながら黙々と問題を解いている内に2人は

戻ってきた。その後は特に何事もなく勉強会は進み、時間も時間だからと解散した。

はぁ…疲れた。

やっぱ勉強は1人でするもんだなと改めて思いましたまる。

夜某所

「…お呼びですか。クロード様…」

「来たか。待ちわびたぞ」

～数分後～

「…了解しました。お嬢は私が必ず救います…!!」

「…そうだ、あと1つ。

学校内で何か困った事があればこの、比企谷八幡という少年に頼れ」
「一体、何者ですか?この少年は」
「そうだな…なんというか、とても強くそして頼りになる少年だな」
「クロード様にそこまで言わせるとは…。了解しました」
(ぱっと見だと、目が腐った腑抜けた輩にしか見えんが…)

＊＊＊

「なぜだろう、凄く嫌な予感がする…」
「おにーちゃん。アホな事言ってないでさっさと御飯食べちゃって」
「アッハイ」

１４

なんとも実りのない勉強会から数日、なんかひとつのイベントを飛ばした気がするが、

まぁ何事も無く過ぎ去っていった。

そんなこんなで今日もまた、いつものように学校へと向かっていった。

俺個人としてはなんでもない何時も通りの日だが、周りにとってはそうではないらしい。

なんでも本日、転校生が来るらしい。しかも美男子。突然決まった事のようで、生徒には通知が遅れたそうだ。

因みになぜそんな情報を知っているのかというと、ホームルームにちょっと早く来ちゃったから寝たふりしながら周りの会話を聞いていたわけではない。ただ目を瞑って机に伏せていたら、近くの席でマイマイが話しているのが耳に入ってきただけだ。

けっ、また桐崎の時みたいにクラス中で大騒ぎするんだろうな。特に女子が。全く少しは周りの迷惑を考えろってんだ。

……別に俺の自己紹介が歓声で掻き消されたのを根に持っている訳ではない。断じてない。

それにしてもまた転校生か…。桐崎に続いて2人目だが、これは唯の偶然なのだろうか？

普通に考えれば違うクラスに割り振られる筈である。何事も無ければいいが…。

「よーしお前ら。突然だが今日は転校生を紹介するぞー

入って鶫さん」

「はい」

考え事をしている内にどうやらＨＲが始まる時間になっていたようだ。

呼ばれた転校生が教室に入ってくる。マイマイが美男子と言っていたからと言う訳でもないが、多少なりとも気になってしまう。ほんの少しの好奇心で机に伏せていた顔を前へと向ける。

そこにはまぁえらい美男子がおったそうな。

「初めまして
鶫　誠士郎と申します。
どうぞよろしく」
噂の美男子転校生が自己紹介が終わると女子の歓声が上がる。
中性的な顔立ちをしているからイケメンという言葉より、確かに美男子という方が似合う奴だ。心なし背景がキラキラしてるように見えちゃうもん。
歓声が落ち着き、定番の拍手に迎えられながら席へと向かう。途中一条に一瞥くれたようだが、俺の席からではどんな表情かはわからない。まぁわからなくていいですけどね。
ガタッ!!
桐崎が驚いた表情で転校生を見つめる。
「つぐみ…!?」
「お嬢…!
お久しぶりですお嬢ーーーーー!!」
転校生が急に桐崎に抱きつき、周りのテンションがさっきの登場時よりも上がっていく。
そんな周りには目もくれず2人の話は進んでいく。

「バッ…バカ…!!
何やってんのよ!みんなの前で…!!」
「ああ、お嬢…!!お会いしとうございました……!!」
会話を聞いていると離れ離れになったカップルの再会シーンにも見えなくもない。
実際、周りにはそんな風に勘ぐってる奴もいるしな。
だが、俺の考えは違った。
あの転校生は桐崎の事を「お嬢」と、確かにそう呼んでいる。そもそも、もし本当にカップルだと考えた時に、仮も自分の彼女の事をお嬢と呼ぶだろうか?彼女がいたことがない俺には全くわからない話だが、世間一般で考えればまずありえないだろう。
つまり、他に桐崎の事を「お嬢」と呼ぶ要因があるとしたら…
ギャング関係者なんだろうなぁ。

昼休み

今は屋上のその更に上の所に来ていた。更に上っていってもお空に飛んでいったわけでもない。屋上に出た扉の横とかにある梯子を上った所な。

購買で購入したパンを食いながらあの転校生について考える。

普通の休み時間中に転校生に桐崎が彼氏を紹介し、親睦を深めるような感じの会話をしていたようだが、なんというかこう、恐ろしい。嵐の前の静けさみたいで。

あの３人が話をする前に転校生と桐崎の会話の一部分がチラッと聞こえたのだが、その聞こえたワードが疑惑を確証へランクアップさせれるには充分な素材となった。

因みに聞こえたワードが以下のものである。

「クロード様の命で…」

完全にギャング関係者でした。

しかもクロードさんの事を「様」と呼んでるって事はあの人の部下なのだろう。

いや、あの人幹部だった気がするし部下がいてもおかしくないけどね。

しかし問題はそこではないのだ。（いやまぁ充分問題なんだけど）

今日いつもとは違った感じがしたのだ。どう違うかというと…見られている。

いつもは見られてないみたいな表現になってしまったが、実際否定できないのが悲しい…

話を戻すと今日は見られていたのだ。しかもただ見られているのではなく、まるで観察されているかのような視線を感じたのである。

そして先ほどの会話の件である。

きっとクロードさんが何かいらん事を話しただと思う。そして転校生が見てきていたのだろう。でなければ、転校生が俺を見ている理由がわからん。もしかしたら「なんか目の腐った気持ち悪い奴がいるな。お嬢に手を出さないか注意しておかねば」みたいな可能性もあったが、視線の中に敵意を感じなかったので、そうではないと願いたい。…違うよね？

幸いというかなんというか、昼飯は教室で桐崎と食べるようなので、さっさと教室から出てきて、なんとなく人目に付かなそうな此処に逃げるようにやってきたのだった。

購入してきたパンも食い終わり、マッカン片手に今後の不安に頭を悩ませていると、屋上の扉の開く音が聞こえたので、ふと見てみると一条と転校生だった。俺の位置からだとこちらから向こうは見えても逆では見えていないようだった。２人は何か話している様だが流石に距離が離れているのか会話の内容は聞こえてこない。

まぁ聞こえてきたって無視するんだけど。

ただ何気なしに２人の様子を見ていると、ふと、転校生の姿が一瞬消えた。そして何時の間にか一条の事を押さえつけていた。それに良く見ると片手には銃を持っている。

あまりの出来事に呆けてしまったが、同時に思う。
クロードさん、これはやりすぎじゃないですかね。
前に会った時、２人の関係に疑問を感じていたようだし、あの転校生は所謂偵察なのだろう。
で、あれはどういった経緯かは知らんが、今の状況に持ち込み、一条の真意を探ろうってつもりだろう。それにしても銃はダメでしょ。この街のお巡りさん達はもっと仕事に真剣に取り組むべきだと思う。俺たちからの税金で給料貰っているのに仕事しないのってどーなのよ？警察の癖に職務怠慢の上、給料泥棒かよ。なにそれ素敵かも…。はっいやいや、俺は専業主婦という立派な夢が……
なんて、現実逃避みたいな事をしている間にも２人の話は進んでいたようで、一条の叫びが聞こえてきた。
「あいつはオレの恋人だ!!　誰にも渡さねぇ…!!」
傍から聞いている分にはこっ恥ずかしいが、なんとも立派なセリフではあるが…普段の２人のやり取りと、一条の横顔を見ているとなんていうかこう、何かを隠そうと必死である様に見える。
そしてそのセリフを聞いた転校生がヤバイ。なにがヤバイって全く関係のない俺が離れた所から見ていても、危機感を感じる程。これは血を見る予感がするぜ…

直後、桐崎が現れた事で転校生は多少落ち着いたのか、血を見るような展開にはならなかった。落ち着きはしても収まりは付かなかったのか、「決闘を申し込む!!!」と宣言し、二、三言葉を交わした後、屋上から出て行った。

その後も、残された2人は暫く話をしていたようだが、その内屋上から去っていった。

屋上に残った俺は少々焦っていた。あの転校生が想像以上にヤバイ奴で、しかもそんな奴から目を付けられている。未だに声を掛けらていないし、そもそも見られていると言ったが、自意識過剰なだけかもしれない。そうであって欲しい。むしろそうであれっ!

そう、俺はまだ何かに巻き込まれたわけでもないし、何時も通りの蚊帳の外状態だ。

「あの、失礼。貴方が比企谷さんだな?」

「ひゃい!!!」

考え事に夢中になりすぎて人が来た事に気付かなかった。行き成り声をかけられたので、ついびっくりして変な声が出てしまった。そして顔を上げると目の前には転校生の顔が…

「おわぁっっ!!」

今度は違った意味で驚き声が出た。そりゃそうだ。さっきまで考えていた相手が目の前にいるのだから。

「い、一体いつから？てゆーか何で俺の名前…」
「いや、屋上に来た時から気付いてはいたんだが、タイミングを逃してしまった。あそこまで威勢よく出ていったのにのこのこ戻ってくるのも決まりが悪かったので、お嬢達が出て行くのを見計らったのだ。」
　にしても、出て行った時と違ってえらく落ち着いてんな。しかしそこに突っ込んでしまうと藪蛇な気がするからスルーしようそうしよう。
「そして、貴方についてはクロード様からお聞きした。詳細までは聞いていないが、なんでも強く、頼りになる人だと…。校内で困ったことがあれば頼れば良いとな。
　しかし、本日半日程観察させてもらった所そこまで強い人の様に見えないのだが…」
「いやいや、なに言ってんの？俺が強い？頼りになる？そんなわけ無いだろ。俺は唯のぼっちだぞ？クロードさんには悪いがそれは買い被り過ぎにも程があるレベルだ」
　やっぱり見られていたんかい…八幡センサーは完璧だったよ…
　それにしても、ホントに何を吹き込んでくれたんだ。あの人は…
　一体全体何をどうしたら、俺が強くて頼りになる人間になるんだっての。
　前からあの人は俺の事を大分高くかってくれていたようだが、やめて欲しい。そして、それを他の人間に言うなんて事はもっとやめて欲しい。てか、絶対にしないで欲しい。

「むむ…あの人の見立てに間違いがあるとは思えないが……
だがまぁ、何か困った事があれば、相談させてもらうとしよう」
一人で唸っていたようだが、なにやら取り敢えずは納得？したらしい。
「ん、まぁ、相談くらいだったら…聞くくらいはしてやるよ」
「うむ。そのような時はよろしく頼む。
…そろそろ昼休みが終わるな。では、私は先に教室に戻らせてもらう」
そういって２ｍ位はある高さを軽々と飛び降り、改めて屋上を出て行く転校生。
そしてまたまた一人になった俺は、今後に起こる面倒な事に巻き込まれる事が無ければいいなと願い、残っていたマッカンを飲み干した。
その後、少しの時間待ってから教室に戻っていった。

放課後

そういえば決闘がどーのこーの言っていたが、それを見る事無く、普通に帰った。

15

転校生の鵜が来てから、早数日。

転校初日の時は、桐崎との関係についてだったり、一条との決闘だのなんだのとクラス中を賑わしたが、今ではすっかりクラスの連中に受け入れられ馴染んでいるようだった。

……受け入れられているし、回りの連中も疑問に思ってないみたいだし、今更突っ込むのも野暮な気がして突っ込んでいないのだが……

「比企谷さん、おはようございます」

なんでリボン付けてんの？

「お、おう」

初日の時はどんな面倒事に巻き込まれるのかとヒヤヒヤしていたが、特にこれといった出来事も無く、挨拶をする程度の間柄になっていた。（決闘の件は巻き込まれてない

ので良しとしておく）

仲良くお話をするような間柄でもないし、気付いたらリボン装備の状態がデフォルトになっていたので、どうしてこうなったのか分からずじまいなのだ。

別に人の趣味にあれこれ言うつもりなんてさらさらないし、なんだったら似合ってるし、違和感仕事しろ状態なんだが、周りも本人も気にしてないようだしいいのか…？

放課後

何時も通りだらっと学校を終え、本屋へ行き目ぼしい新作本が無いかを確認し、ついでにかまくらの餌を買い足しておこうと、ペットショップに足を向ける。

ペットショップ内をぶらぶらしていたら、大量の荷物を抱える一条を見つけた。

「お、比企谷じゃん。こんなとこで奇遇だな」

「おう…。一条こそ、なんだその量は？」

「いやなに、学校で飼ってるペットの餌だよ。ウチは珍しい動物が多いからこうして近場まで自分で買いに来なきゃ行けないんだよ」

ほ～ん。ご苦労な事で。てか、自分らで買いに来なきゃならんほど珍しい動物って何飼ってんだよ、ウチの学校は…

「それにしても一人でそれだけ持って帰んの大変なんじゃないのか？」

「いや、一応もう一人一緒に来てるし、それにお店から台車も貸してくれるから問題ないぞ」

「ん、そうか」

会話も一区切り付いたし、俺も自分の用事を済ませようと一条と別れ、再び店内をぶらつく。何気なくペットの展示コーナーを見てみると一人の男子？がいた。

何故に疑問系なのかって？

「ひ、比企谷さん…!?」

クラスメイトの美男子君が完全無欠の女装姿なのを見れば誰だって男子だなんて断言出来ないと思うんだ、俺。

「お、おう…、いや、なんだ、その…邪魔したな」

そう言って踵を返し、足早に立ち去ろうとすると腕を掴まれる。

「ちょ、ちょっと待って下さい！今物凄く酷い誤解をされている気がします!!」

男だと分かっていても、見た目は完璧女子なので、そんな涙目で見られるとちょっとドキドキしちゃうじゃん。

「うんうん、大丈夫分かってる。分かってるから取り合えず、その手を離してくれ」
俺の出来る精一杯の慈しみの眼差しを向けると、更に焦った様子の変tもとい鶫。
「絶対分かってないです！一先ず説明をさせて頂きたく思うので、その可哀想な物を見る目をやめてください!!!!……痛っ……！」
ひと悶着繰り広げると、足を痛そうにしているので近場の座れそうな所に場所を移す。

＊＊＊

外に場所を移し適当に座れる場所に座らせ、履いていたヒールを脱がせ、足の様子を見てみると酷い靴擦れを起こしている様だった。
「あ～、こりゃ酷いな…。ちょっと大人しくしとけよ」
そう言ってカバンの中を漁り、目的の物を探す。
「あの…一体なにを？」
「ん～…っと。あったあった。ちょい染みるかもしれんが我慢してくれ」
目的の応急手当セットを取り出し、傷を消毒し、絆創膏を取り合えず貼っておく。
「簡単にしか治療してないから、後は家帰ってからちゃんとやってくれ」
使い終わった物を再びカバンにしまい、立ち上がる。
「あ、ありがとうございます。

そ、その…比企谷さんは、なぜそんなに準備が良いのでしょうか？」
「これはまぁ、準備が良いと言うよりは昔からの癖だな」
「癖…ですか？」
「おう。今ではそんなに無いが、小・中学生の時は色々と生傷が絶えなくてな。
まぁ、そん時からついつい持ち歩くようにしてるってだけだ」
なんとなく周りの景色を眺めながら、少し昔の事を思い出す。
……あの頃は、小・中学生でありがちな（高校生でもたまにあるけど）気に入らない奴には何をしてもいい、という世にも奇妙なルールが成り立っていて、そんな気に入らない奴にされるのは何時もどんな時も、俺の役回りで、決まってサンドバッグ役になっていた。
サンドバッグにされた後、家に帰ると決まって小町に泣きながら心配されて、そんな小町の泣き顔を見たくないが為にせめてもの対策として、傷を目立たなくするという技術を身に着けたものだ。
いかんいかんと頭を掻く。
改めて、どうしたもんかと考えていると、ペットショップから一条が台車を押しながら出てきた。
……どんだけ買い込んでんだよ。

「店ん中に居ないと思ったら、こんな所にいたのか。ちょっと探しちまったぞ」
あぁ、そういえば一緒に誰か来てると言っていたが、鶫の事だったのか。
一人納得していると２人はあっと言う間に言い争いを始めている。
…言い争いと言うか、鶫が突っかかって一条は流しているだけの様だが。
「お～い、比企谷。悪いけどコイツ家まで送っててくれないか？
俺は買った餌、学校まで運ばなきゃなんねぇし」
後ろでなにやら抗議している鶫の姿を見て一瞬、俺が送っていく必要など微塵もないんじゃ…と思ったが、足を怪我して歩きにくそうだし、何かあっても後味が悪いし、しょうがないかと承諾する。
「へいへい」
「助かる。流石に、怪我した『女子』を一人で帰らせるのもどうかと思うしな」
……ん？
今、物凄く聞き捨てならない単語が聞こえた気がするぞぉ？
「ちょ、ちょっと待ってくれ。
……怪我した…なんだって？」
「ん？だから怪我した『女子』を一人で…ってどうした？」
改めて鶫の方を見る。

「あ、あの比企谷さん。私は大丈夫なので、気にせずご帰宅なさって下さい」
なにやら恥ずかしがっているようで、改めて見ると声も仕草も女にしか見えない。
背もそこそこあるが、体つきはとても細く見える。
だが、男…だ。
ミニスカートのワンピースが似合っている。見た目だけなら女より女らしい美少女。
だが、男だ。
だが、男…だ
男…だ、男…のはずだ
「はぁ、やはり勘違いをされていたのですね…
改めまして、鶫　誠志郎。正真正銘の『女』です」
女だあああああああ！

はっ！いかん!!!何か変な電波を受信してしまったようだ。
しかし、女子だという事を意識すると、さっきまでの行動が途端に恥ずかしくなってきた。

なに、女子の足触っちゃってんの！

いや、なんか柔らかいなぁとか、ちょっといい匂いするなぁ…とか、思ったけども、これ傍から見たら唯の変態行動じゃねぇかっっ!!!いや、男相手にそんな事考えてる時点で駄目じゃねぇか!!!!!

「あ、あの…大丈夫でしょうか？」

「あ、あぁ。気にすんな。ちょっと自分の行動を振り返って自己嫌悪に陥ってるだけだから」

「まぁ、なんか良くわかんねぇけど、そいつの事頼んだぞ、比企谷」

ちょ、待って！この状況で２人にされるのはマズい！特に俺の精神が!!今の俺の精神状態だとソウルジェムすぐに穢れが溜まっちゃうって！災いと絶望と撒き散らすだけの存在になっちゃうから！え？穢れるの目だけにしとけって？うるせぃ…ってヤバイ。頭がこんがらがって考えが可笑しな事になってる!!!

だが、現実とは非情な物で気が付けば、一条の背中はあっと言う間に見えなくなってしまっていた。

残ったのは、項垂れている俺と鶫だけとなった。

＊＊＊

少し時間をおいたおかげで多少、冷静になった。
今更グダグダ言ってもしょうがないと腹を括る。
「おい、鶫。取り合えず歩けそうか？」
「え、ええ。歩く程度であれば問題は…!!」
立ち上がる事は出来た様だが、歩く事は難しそうだ。
仕方が無いか……
「はぁ……。ほれ」
「え…？」
今、俺は鶫に背中を向けて、しゃがんでいる状態だ。
「いいから……乗れよ」
「い、いえ。そんな事して頂かなくても私は一人で…」
「碌に歩けもしないのにどうやってこっから帰るってんだよ…。
それに一条にも頼まれちったし、俺としてもなんていうかこう、後味が悪いんだよ」
「……では、失礼します」
そういって、恐る恐るといった様子で俺の背中に体を預けてくる。

これは……大変な事になってしまった!!!
少しでも気を抜けば背中に意識が集中してしまいそうだ。
ここは俺の精神安寧の為にもさっさと済ましてしまうに限る。
「で、お前ん家ってどっち？」
「は、はい。まずはこの道を……」

鵜ナビの指示を聞きながら、黙って歩っていると急に質問された。
「そういえば、比企谷さんは私が女だと気付いていなかったのですね」
「あぁ、まぁ正直、全然気付かなかった。なんかすまん」
そこまで興味がなかったんです…

「いえ、名前や普段の服装の所為で、勘違いされる事は多々ありますので」
「ぶっちゃけ、今の格好だっててっきり、ギャングっていう男社会の中で育ってきて、何かしら拗らせて女装趣味に目覚めたっていう変t…苦労人なのかと思ってたし」
「それはまた、酷い勘違いをされていたものです」
声の雰囲気からして苦笑いしているのだろうか、若干呆れられている気がする。
話題を逸らそうと、何かコイツの興味を引きそうな話は…

「そういや、鶫と桐崎って一緒に育ったんだよな。
いつから一緒にいるんだ？」
「…そうですね。
私達が５～６歳の頃でしたので、もう１０年程も前になりますね。
当時のお嬢は初コイをしていたようで、よくその相手の男の子の事を嬉しそうに話してくれたものです」
普段であれば、鼻で嗤い子供の頃の事なんて～と言うところだし、鶫の表情も見えなくて俺の勘違いなのかもしれない。ただ、聞いているとなんとく、コイツにとってこの想い出は、桐崎との大切な物のような気がして、嗤ってしまうのは悪い気がした。ただちょっと羨ましく、そしてそれを誤魔化すように出た言葉は、考えなしの適当なものだった。
「んで、そんなお前さんの初コイはどんなもんだったんだ？」
「は!?わっ…私のですか…!?
そんなものあるわけないないじゃないですか…！」
そうか？ギャングなんて男だらけの環境であれば、イケメンからマッチョまで多種多様な男性陣が揃っていそうな気がするんだがな。
「…ありませんよ。そんなものは。

今までも…そしてこれからも。
私はお嬢にお仕えする事が使命だし、それが私の幸せです。
それに私は女を捨てた身なんです…
私はお嬢が幸せなら、それで…」
「……でも、そんだけ誰かの為に一生懸命になれる奴なら
お前の事、好きな奴はいると思うぞ?」
なんだかんだコイツは１０年間、桐崎の為に頑張ってきた。
素直に凄いと思えるし、俺には到底無理な事だと思う。
誰にでも簡単には出来ない事だろうし、それ即ち鶫の魅力なんだと思う。
で、あればそういった処に心惹かれる奴はいるんじゃねーかと俺は思う。
「……?」
なぜか、だんまりを決め込んでしまった鶫。

あの後、時折聞こえるナビゲーションに従いながら、無事鶫を家まで送り届けた。

そして、俺も只今帰宅。

「たで～ま～」

「にゃ～お」

やっべ餌買ってくるの忘れた。

番外編・『星が瞬くこんな夜に』

今、私と比企谷くんの２人きり。
場所は地元でも知る人ぞ知る天体観測スポット。
林道を抜けた先にある小高い山の上。
どうしてこんな状況になってしまったのかしら・・・

切欠は誰かの一言だった。
「今夜、星を見に行こう」
それからあれよあれよと話は進み、皆で観測スポットへと向かう事となった。
比企谷くんは『俺は関係ありません』と言った感じだった。

だが、彼の妹を巻き込む事により連れ出されたのだ。
（以前、彼の家にお邪魔した時に連絡先を交換しておいたのだ。させられたとも言うわね）

道中、普段と違う雰囲気に各々楽しんでいるようで、比企谷くんも多少、楽しんでいる様に見えた。
目的地に到着。
それから、自由行動となり時間と集合場所を決めて、バラバラに行動をしていた。
そして気付けば一緒に行動していた人達と逸れてしまい、ばったり比企谷くんと遭遇したのだった。
聞けば、比企谷くんも
「いや・・・星を眺めながら歩いていたら迷って・・・」
との事で、スマートフォンは圏外でＧＰＳは使えるが、地図アプリがまともに機能しない状況。
完全無欠の迷子である。
とはいえ、少し歩けば電波も拾えるであろうと比企谷くんと２人歩きだしたのだった。

以上が、今現在に至るまでの簡単な経緯。
誰かに伝える訳でもないが状況整理の為つい、思い返してしまった。

・・・中心都市から離れ、周りは静寂に包まれている。
季節の割には大分冷え込んできていて、つんと冷たい空気が頬をさした。
『ちょっと痛いな』と思いながら、つい比企谷くんを見る。
思っていた事が顔に出ていた様で『…いやいや、俺のせいじゃないでしょ』と、そんな顔をしている。
別に比企谷くんを攻めた訳でも無いのに…
だけどこのやり取りが少し可笑しく思えて、クスッと笑みが零れる。

なんでもない一時。
何故か、この瞬間が一生記憶に残るような気がした。

～～～～～～～

ふと、スマホを見る。
先程からそんなに時間は経っていない。
隣を見れば、比企谷くんは星空を見ている。
つられて私も空を見上げる。
綺麗な星空だ。
いつもとは違う雰囲気にお互いの口数は少ない。
まぁ、元々話が盛り上がるタイプでも無いのだが。
だけどこの雰囲気が心地良くて、どうしてだろう。
つい願い事をしてみてしまう。
『叶うのなら、この時がずっと続きます様に…』
私らしくないな、なんて自覚はあるけれど。
同じ空を見上げながら、大切な事ほどすぐそばにあるのかも…
なんて思った。

～～～～～～～

暫く歩いたが、未だ電波は圏外のまま。
変わらず、お互いの会話も殆どないので、普段考えない様な事も考え始めた。
どうして比企谷くんは悪感情には敏感なくせに好感情には疎いのかしら。
いつも、あの子からのアプローチに気付いていない。
こっちでどれだけサポートなどしても、のらりくらりと逃げようとする。
逃がさないけど。

……恐らく、というか中学時代の件を引きずっているのでしょうね。
他にも、比企谷くん本人の口から出る黒歴史も関係しているのかもだけど。
これらは本人に乗り切って貰うしかない…のかもしれない。
きっとこっちから何を言っても素直に受け止めて貰えないだろうし。

私からなんて特にね。
普段の事もあるし、愛想が良くないのも自覚している。
比企谷くん程じゃないけど。

～～～～～～～

ふと、何時ぞやの休日を思い出した。
本屋に出かけていて、あの日もばったり出くわしたのだった。
本好きなのはなんとなく知っていたけど、私の好きなジャンルもカバーしていたのには驚いたものだ。
あの時は正直、楽しかったし…存外、嬉しかった。
あの子とはジャンルが違うし、そういった話をする相手もいなかった。
別に、読書なんて自分が楽しめればそれでも構わないと思っていたのだ。
だけど、あの時、自分の好きな領域で会話が盛り上がったのが、嬉しかったのだ。
あの時はあの時で、『あぁ、こういったのも悪くないな』などと思ったものだ。

まぁ、それ以降の事に関しては、お互いの印象は良くなかったでしょうけど。

……この間の事を謝罪して、そしてそれを受け入れて貰った。
比企谷くんは全く気にしていないとの事だった。

そしてそれ以降も、以前と変わらないまま。
あの子とは多少、変わったみたいだけど。

一体、何故いまこんな事を考えてしまうのだろうか。

私としても、謝罪したとはいえ罪悪感が全く無いわけでも無い。
だけど今更、聞くのも変な話だ。

～～～～～～

お互い無言が続いたが、比企谷くんがふとこんな事を言った。
「流れ星とか…見えないもんかねぇ…」
そして、人差し指だけを立てた右手を星空へと向ける。
勿論、そんな事しても何かが起こる訳でもない。
それは本人も分かっているようで
「らしくねぇな…」
そう言って、俯き、右手を下ろした時だった。

人差し指の動きに合わせるように一筋の軌跡が描かれたのだ。

比企谷くんは気付いていないようだったが、私は見ていた。

それはまるで、魔法のようで……

～～～～～～

その後、スマホも無事圏外から復帰する事ができ、集合時間から３０分程遅れての合流となった。

皆から心配の声をかけて貰い、素直に謝罪をした。

次の日は休日という事もあり、女子はお泊り会を、男子もやろうと言っていた。

だけど比企谷くんは当然の様に帰宅していくのだろう。

妹さんも帰ると言っていたしね。

そして、比企谷兄妹、男子達に別れを告げ歩き出す。
思い出すは、合流するまでの間の出来事。
鼓動の跳ねた瞬間。
暗い中、足場が悪い事に気付かず、バランスを崩し、つい比企谷くんの手に触れた時。
確かに鼓動が跳ねた。跳ねてしまったのだ。
隣にいる子をちらりと横目で見る。
そして、少し痛む心。
もしかして…これって……

『星が瞬くこんな夜に』

16

鶫を送り届けた日から暫くたった。
あの日から、今までの間に一条が体調を崩し、見舞いに行かないかと小野寺から誘われたが、辞退した。
なんでかって？
理由はいたって単純。やーさんの家に行くの怖い。
俺みたいなのが行ったらどんな騒ぎになるかわからん。
ていうか、俺は一条とそこまでの仲になった覚えはないしな。
そんな俺とは違い、見舞いに行こうと思える小野寺は凄いと思う。これは所謂恋する乙女パワーなのかね。
ちなみに、その件を断った後日の宮本はもっと怖かった・・・。

まぁなんやかんやで今日は、林間学校の日である。
班分けは俺、一条、マイマイ、桐崎、鵜、小野寺、宮本となっている。
まぁ、俺としてはどこの班でも良かったので特に文句は無い。
しいて言うなら班決めの時の宮本の圧が凄かったという事くらいだろうか。
＊＊＊
無事に目的地に到着である。
バスイベント?そんなもん知らんな。
乗る時、先生に「俺、バス酔いしやすいんで」と言い、先生の横のポジションを取り、音楽を聴きながら外を眺めてたら着いたし。
「よーし、みんなよく聞けよー！
プリントにも書いてあるけど、お前らは今から近くのキャンプ場で飯盒炊さんとカレー作りだ。
楽しんで作れよ～！」

「「「「あーい」」」」

さて、到着して間もないが、いきなり難所の到来である。

キャンプ場で、みんなで仲良くカレーを作る。

なんて事のない、いたって普通の林間学校のイベントだ。

だが、ここで問題なのは小野寺だ。

思い出すのは、調理実習の時のケーキ。

見た目は素晴らしく、美味そうなのに味が、その・・・あれだ。うん・・・。お腹痛くなってきた・・・。

正直、桐崎も不安だが、あいつは逆に見た目は酷いもので、味は美味いと小野寺と間逆なので、最悪の場合は見ないで食えば良いだけだ。

他の奴らはどの程度の料理の腕前なのかは知らないが、小野寺に料理をさせるのは拙い。

下手したら、林間学校の間ずっと布団と仲良く過ごすだけになってしまう。

それはそれで、色々気を使わなくてもいいのかもしれないが、あの時の二の舞は御免だ。

それとは別にあまり部屋に篭る様な事も、今回は避けたいからな。

しかし、ここで俺が出しゃばってこの場を仕切ろうものなら「え？何急に張り切って

んの？キモ・・・」って思われてしまうだろう。どうしたものか・・・。

「小野寺と宮本は薪を貰って来てくれ。
桐崎、お前はここで俺が指示する。勝手に動くなよ」

俺がどうするか悩んでいると一条がテキパキと指示を出し始めた。
そういえばお見舞いの時にお粥作って貰ったとか言ってたっけ。なるほど、あいつも被害者だったか。ならあいつに任しておけば問題なさそうだな。

そうして出来上がったカレーは普通だった。

「おお～～～！
ここが今日オレ達が泊まる部屋か～！」
「思ったより広いね～」
「こういうとこ、ウチのガッコ気前良いよな～」

最初の難所を越え、俺達が今回泊まる部屋にやってきた。
部屋は和室となっており、窓から見える景色も悪くない。
部屋自体は素晴らしいもので、一日陽に当たりながらゆったり過ごすのも良いかもと思う。確かにマイマイの言う様に学校側も気前がいい様に思える。
だが・・・・・・

「その上、ふすまごしとはいえ女子と同じ部屋で寝られるなんて・・・
オレこの学校入ってホント良かったよ・・・!!」

そう、女子と同室なのである。
本当に何考えてるんだこの学校！
あれか？良い宿取ったらお金足らなくなっちゃったの？だったら宿のランク落としてもいいからちゃんと男女別に取れよ。何かあってからじゃ遅いんだぞ！
まぁ俺の場合、「ヒキタニと同じ部屋とか、絶対なんかされんじゃん～。マジ無理だから～。アンタ押入れね～。同じ部屋に置いてあげるだけ感謝して欲しいわぁ」みたいな事になってもおかしくは無かった。今回、同室は小野寺達だし、変な事は言われないだろう。どう思ってるかは分からないが・・・。

そもそも学校側が男女別に部屋を取ってくれていればこんな事に頭使う必要なかったというのに・・・!!

生徒の事を信用してるんだか、何も考えてないの一体どっちなんだか・・・。

なにはともあれ、こういった事もあってなるべく部屋には篭っていたくはないのだ。

女子陣から一番離れた場所に荷物を纏め、飯の時間まで少し辺りの散策しようと部屋を出ようとする。

「あれ？比企谷どこ行くん？

トランプやんねーの？」

マイマイから声がかかる。

他のメンバーは初コイのエピソードを語るという罰ゲームでトランプをやるらしい。

「いや、俺はいい。

辺りを散策してくるから。

飯の時間までには戻るし、気しないでくれ」

「そんな事言って～、負けるのが怖いのか～？」

「あほか。そんな挑発には乗らん。

第一初コイの事なんざ昔すぎてもう忘れたわ。

朝から団体行動ばっかしてんだ。ここらで１人の時間が欲しいんだよ。」

そう言ってさっさと部屋を出る。

しかし、初コイねぇ・・・。はて、俺の初コイは一体何時だったんだけか？

１７

辺りをぶらりとしよう。そう決めたのはいいけどどこら辺に行こうか。
明日は山のほうに行く事になってるし、かといって反対方向は飯食った場所に戻るだけだしなぁ・・・。
取り合えず外に来て周りをぐるっと見渡すと俺達の宿の方を見つめる怪しい人影が・・・
てか、あれクロードさんじゃん・・・。こんな所まで着いてきたのか。仮にも幹部だろうに何してんだか・・・。
てか、あの人来てるって事はこの林間学校が無事に終わる気がしない。
しかし、なにか起こるとしても巻き込まれるのは主に一条だし、そんなに気にしなくてもいいか。ご愁傷様、一条。

「おや、ヒキガヤ君ではないか
・・・一体何をしているのかね？」

おぉっと、一条に向けて合掌していたらクロードさんに見つかってしまった。
「いや、ちょっと散歩に・・・
ていうか、何をしてるのかってこっちのセリフですよ。
クロードさんこそ何してるんですか?」
「ふっ、決まっているだろう。
お嬢の護衛、それと・・・
あのクソガキの始末だよ」
いや、決まってねーよ。なんでそんなイイ笑顔なんだよ。
面倒事起こす気マンマンじゃねぇか・・・
早々に切り上げようそうしよう。
「は、はぁ・・・それじゃ頑張って下さいね。
俺もう行くんで・・・」
「まぁ、待ちたまえ」
おいやめろ。離してくれ!なんかしょうもない事に巻き込まれる気がする!
「な、なんですか?一体」
まぁ、ギャングのしかも幹部の人にそんな事言える度胸もある訳も無く・・・
「いやなに、あのクソガキを始末する作戦なんだが、

全体的の流れは決まっているのだが、細かい所を詰めきれていない。
そこら辺、ヒキガヤ君の意見を聞いてみようと思ってね。
あくまで参考程度なので、遠慮せずに意見を言って欲しい」
面倒事を起こす側としてしょうもない事に巻き込まれる事に・・・
「はぁ・・・・・・・
分かりました。取り合えずその全体的な流れとやらから、聞かせて下さい」

＊＊＊

「・・・という流れで考えている。
そして、奴は今日から変態ノゾキ魔の烙印を押され、暗く閉ざされた青春時代を送る事になるのだ・・・フハハハハハ!!」
一通りの流れを聞かせて貰った訳だが・・・
正直、この人本当に幹部か？と疑いたくなる位に、杜撰で陰湿だった。
いやまぁ全体的な流れしか決まってないって言ってたしこんなもんか？
・・・・・・うむ、これは上手い事やれば何事も起こらずに済むんじゃないか？
とはいえ、相手は仮にも一大ギャングの幹部だ。説き伏せられる気はしない。

それに今回の作戦が成功しようとしまいと俺には何の影響もない。
適当に流す位でも良いんだが、なんかなぁ・・・

・・・いや、あれだ。仮に成功したとして、俺の関与がばれたら命が危ない！
学校内で後ろ指を指される程度なら問題無いが、仮に一条の実家にばれたら大問題だ。
最悪の場合、小町にまで危険に晒される事になってしまう。そんな事許される筈がない！
うん、小町と命が危険に晒されるならしょうがないよな。
クロードさんには悪いが今回は諦めて貰おう。
取り敢えずは、気になっている点から切り崩していくか。
「まず、最初の部分から。
確かに今回俺達は、男女別で同じ大浴場を使用する事になっており、入浴時間が別れています。
それぞれ1時間毎に振り分けられていますが、一条自身は何時入浴するかは分かりません。

そこはどうやって把握するつもりなんですか？」
「そこは問題ない。
今回は私自ら、奴の監視を行う。
いつ風呂に入るとしても問題ない」
ふむ。
まぁ、流石にそこまで考え無しな訳ないか。
「一条の入浴時間の把握の仕方は分かりました。
では、次の質問です。
何時頃一条が風呂に向かうか分かりませんが、女子の入浴時間に合わせるとなると、場合によってはそれなりに時間を稼がなければなりませんが、時間稼ぎはどの様に？」
「うむ、旅館に電話をかけ、奴を呼び出す。
そうすると電話を取りにフロントまで行くだろう？
私が調べた所、フロントから大浴場まで往復で大体１０分程度だ。
最悪５回は繰り返す必要があるが・・・まぁ、その時は部下でも使うさ」
いや、そんな短時間に何回も繰り返せば流石に旅館側が不審に思うでしょ。
しかし、突っ込み所は他にもあるので深くは掘り下げない。
「では次です。

同じ大浴場を使いますが、脱衣所も共有です。
脱衣所に服があれば、女子達も気付くのでは？」
「そこも問題ではないと考えている。
時期を見計らい、私が回収する。
その後、男湯の暖簾を取っ払い、女湯と書かれた物にしておけば・・・
うむ、やはりそこまで大きな問題は無い様に思えるな」
うむ、じゃねーよ。
なんでここまで自信満々なのだろうか。時間ギリギリまで風呂に入ってるのが一条だけとは限らないし、時間がギリギリ過ぎると大浴場を諦める可能性だってある。それに一条が風呂にゆっくり入らないタイプだったら？とか色々あるでしょ。
・・・しかしまぁ、この様子だと一番重要な事には気付いてなさそうだな。
「はぁ・・・
じゃぁ、次の質問で最後にしますよ。
もし、そこまで全部上手く行けば確かに、一条は変態ノゾキ魔になるでしょうね。
でもそうなると、必然的に桐崎もノゾかれる事になりますよね？
クロードさん、彼方がそれに耐えられますか・・・？」
「そ、それは・・・」

「まだ質問は終わってませんよ。
ていうか、一番大事な事です。
俺が一番聞きたいのは、
『ノゾかれたと知った時の桐崎がどう考えるか？』
という事です。
クロードさん、貴方は２人が本当に付き合っているか疑問視してますよね？
では、もし本当に２人が付き合っていないのであれば、桐崎は好きでもなんでもない男子に、その・・・は、裸を見られる事になるんです。ヘタしたらトラウマもんですよ？
それに本当に付き合っていたなら、彼氏がそういった事をした事に少なくないショックを受けるかもしれません。
どっちにしても桐崎は何かしらの傷を負う事になるんではないかと思ってます。
・・・そこら辺の、特に桐崎の気持ちに関してはどう考えてるんですか？」
「むぅ・・・・・・」
そう。結局この人は桐崎を大事に思いすぎているが為、気持ちが先行しすぎて、本人の気持ちにまで考えが及んでいないのだ。
女子っていうのは簡単な事で心に傷を負う。ソースは俺。

・・ていうか、つい色々言っちゃたけど、大丈夫かな？生意気言ってんじゃねぇ！ってここで消されたりしないよね？いやでも、この人意外と激情家だからなぁ・・・

あぁ、こんな事になるのなら部屋で大人しくトランプに参加しとけば良かったなぁ。

「ヒキガヤ君」

「ひゃいっ」

俺が色々と後悔している間にクロードさんは答えを出したようだ。

どうなんの俺、どうなんのぉ!!

「今回は、辞めておこう。

確かにあの小僧は早急に始末したいところだが、それでお嬢の気を煩わせてしまうのでは意味がないのでな。

それに今回しかチャンスが無いわけではない。

またの機会に、お嬢を巻き込む事なく排除できる方法を考えるとしよう。

・・・・・その時はまた、君の意見を聞かして貰ってもいいかな？」

「え、あ、は、はい」

そんな時が来ない事をただただ祈るだけです。

しかし、良かった。「俺ア、ただ壊すだけだ」とか言われたらどうしようかと思った。

桐崎の為だったら普通にやりそうな人だし。

「今回は一先ず、見守るだけにしておこう。
君の様に、お嬢の事を考えてくれる男が傍に居るのであれば私としても安心だ」
「ちょ、変な勘違いはやめて下さい。
別にそんなんじゃないんで・・・
今回はあれですよ、あれ、そう、一条に何か有って俺が関わっているのがばれたら、アイツん家に何されるかわかんないんで・・・」
「そうだな。
私としてはばれる様なヘマなどしないが、確かにそういった可能性もある。
今回は、そういう事にしておこう。
・・・・・・では、私はもう暫くここでお嬢を見守っている。
長い時間引き止めて悪かったね」
そう言ってクロードさんはまた、宿の方へと意識を戻した。
最後まで変な勘違いされたままだったなぁ。
とはいえ、何事もなく済みそうだし、一安心してもいいのかね・・・

＊＊＊

クロードさんと話して疲れたのだろう。
結局、どこへ行く訳でもなく宿に戻ってきて、マッカン片手にロビーでボーっとしていた。

はて、俺はなんであんな偉そうな事を言ってまで止めたのだろうか？
なにかあって一条の家に目を付けられるのが嫌だった？
そんなんは建前にすらならない。クロードさんがここに来ている事を知っているのは俺だけだ。実際、ノゾキ魔にでっちあげられたとしても、クロードさんが関わっている事など想像もしないだろう。さっきの段取り通りに事が進んだ場合、宿側のミスで片付けられる可能性だって有った。
じゃぁ、桐崎を可哀想だと思った？
それもない。そもそも可哀想だと思うことは、相手を下に見ているという事だ。
何時だって最底辺にいるのは俺であって、俺より下に居る奴なんていないのだから
そもそも可哀想に思う事自体、間違っている。

う～む・・・。

「あ、おーい比企谷。

そろそろ集合時間だ。遅れないようにな～」

思ったより時間は過ぎていたようで、日原先生に声を掛けられ、思考の渦から抜ける。

まぁ、そんなに気にする事でもないか。

＊＊＊

ノゾキ騒ぎなど発生せず、一日が終わり就寝時間となり、大人しく眠るだけ。

だったはずなのに、最後の最後でマイマイがやらかし、ベランダで吊るされる事になりましたとさ。

18

林間学校2日目
マイマイに誘われ、一条と三人で朝食を食ってる。
飯を食っている間は特に他愛も無い会話をしていた。
・・・・・・主に一条とマイマイが。
いやだって俺は話すことないし、大体「あぁ」とか「そうだな」位しか言う事ないし・・・
「・・・・・・ところでお前らさ。
今夜のイベントって知ってっか？」
「あ？」
「今日、山から帰って来たらよ
毎年恒例の肝試しをやるんだよ」
「肝試し～？
高校生にもなって・・・」

「だが、ただの肝試しじゃないぜ？
なんとクジを使って男女でペアが組まれるのだ。
そして更に重要なルールがもう一つ・・・
ペアになった男女は必ず手を繋がなければならない!!!
なんと素晴らしい伝統!!拒否は許されない!!
どうだ!!燃えてきただろう!!」
「・・・あぁ、なるほど。
そうやってお互い簡単に逃げられない様にした状態で、
先に逃げ出した方が後にチクチクと言われ続けるんだな。
もしくはそうならない為に、目の前の恐怖を我慢出来るかどうか・・・
流石、高校生になると肝の試し方が一味変わってくるな」
「いや、それ絶対間違ってるから」
む、そうだろうか？
ていうか、そもそも俺と組む事になってしまった女子からすれば肝試しどころではない罰ゲームになってしまうだろう。それに俺の方にもダメージが入る事はもはや確定的だ。
やはり、ここは俺や他の奴の為にも参加しなくて良いだろう。ダメ？

「誰が買うか!!
２０００円でどうだ!!?」
「手を打とう」
一条は、マイマイと小野寺とのペア券をやり取りしている。
張り切るのは構わないが、実際難しいと言わざるを得ないだろう。
俺達の学年の全体人数は２０７人。男女比が１：１ではないがそれでも男子だけで約１００人。
マイマイが協力するにしたって単純に確率は１／５０だ。
「・・・一条よ、５０００円でどうだ?」
だが、もう一人いれば確率は更に上がる。
「高ぇよ!!」

結局、３０００円で手を打った。

「お・・・おはよう
比企谷君
昨日は眠れた？」
朝食の片付けを終え、給茶機でお茶を飲もうとしている時に声をかけられた。
「・・・っ！
な、なんだ小野寺か」
急に話かけられるとビクッとするからやめてほしい。
ほらそこ、笑うんじゃありません。
「ふふっ
あっ、ご、ごめん
見かけたからつい・・・」
「いや別にいい。
で、眠れたかって？
もし、あの状況でぐっすり眠れた奴がいたなら尊敬しちゃう位には眠れたわ」
「あ、あはは・・・
ごめんね？るりちゃんがあんな事しちゃって」

「いやいや、それこそ小野寺が謝るようなことじゃない。
巻き込まれた事は大いに不満があるが、原因は舞子にあるしな。
それに止めなかった俺らにも多少なりとも責任があるんだろ」
「そ、そうかな・・・？
・・・・・・そういえば知ってる？
今日の肝試しの事・・・」
「あぁ、男女カップルでやるんだろ？さっき聞いたわ。
・・・部屋割りといい、肝試しといいホント何考えてるんだかな、この学校。
俺と一緒になった奴に申し訳なさすぎるわ」
「そうだよね。
で、でも、私は、比企谷君と一緒だと
う、う、嬉しいけどな・・・・・・・」
・・・っ！
い、いかんいかん。
ここで惑わされちゃだめだ。小野寺は言ってくれた。こんな俺とでも仲良くしたいと。
そう、これはそういったもので、別に俺の事が好きだとかそういう事じゃない。唯の

ありふれた日常会話の一つでしかない。
落ち着け俺。クールに、そうＣＯＯＬにだ。
「そうだな。俺も小野寺と一緒なのは、その、い、嫌じゃない・・・かもしれない・・・」
あ、ダメだ。全くクールじゃないわ。
つい、照れくさくてそっぽ向いてしまう。
そして気付く。めっちゃ見られてますやん・・・
他人からの目線に気付かないほどに動揺していたかっ！
それもそうだ。今は朝食の時間。場所は皆集まる食堂だ。
しかし、これにより多少なりとも冷静さを取り戻すことが出来た。
「あ、あ～、今言った事は忘れて貰って構わない。
・・・・・・もう暫くしたら集合時間だなぁ。
お、俺はもう行くから、小野寺も集合遅れんなよ」
「あ、う、うん」
そう言って逃げるようにその場から離れていった。

３０００円なぁ・・・

＊＊＊

「・・・よーし、全員注目！
これより恒例の肝試し大会を開始する!!
準備はいいか野朗共ーーー!!」
「「「「おおーーーーーーーーー!!!!」」」」

ハイキングや、飯などの諸々が終わり、肝試しの時間が始まろうとしていた。
俺としてはハイキングで体力で使い切ってしまった感があるので、是非とも辞退させて頂きたかったのだが、るりるり＆マイマイに引き摺られる様に運ばれて参加させられている。
ていうか教師共よ、呑気に酒盛りを始めると羨ましいですな。
自主性を重んじて？責任逃れの常套句じゃないですかやだー。

なら俺の自主性も重んじて貰って部屋に戻って良いですか？だめ？あぁそう。

「では、続いて男子～」

おっと、グダグダ考え事している間に男子のクジ引きが始まる様だ。

基本的にこういった時は最後の方に引くようにしているので暫くは眺めているつもりだ。

「ゴホンゲホン。

あーーー、ゴホン！

へ～、小咲は１２番だったんだ～

小咲は～１２番～」

るりるりが周りに聞こえる様な大きな声で言う。

するとどうだろう。周りの男子共が俄然張り切りだした。

誰もが引く時に祈るように引くではないか。だが、お目当ての番号ではないのであろう。

ショックを受けて項垂れる者、元々期待してなかったのであろう笑いながら番号を披露する者、逆に顔は笑っているがショックの色を隠しきれていない者。様々な反応が窺

える。

なるほど。それを見て楽しもうという魂胆か。流石るりるり性格が悪い。

そんな風に思い、ふとるりるりに目を向ければ、目が合ってしまった。

え？なに？え？なんでこっちくんの？怖い怖い！性格悪いって思ったのがダメだった？

うそです！めっちゃ気が利く良い奴！メガネめっちゃ似合ってるから！可愛いから!!」

「なっ!?

～～～さっさと１２番引いて来いっ！」

「いってぇ!!」

何故か思いっきり蹴飛ばされた。解せぬ。

てか、１２番引いて来いって言われてもなぁ。こればっかりはどうしようもないだろうに。

仮に引けたとしても売り払う約束しちまったし・・・。

いや、それを知ってるからか。恐らくマイマイ辺りにでも聞いたんだろう。

なんだかんだ友達思いなんだよな。本人は認めようとしないだろうけど。

で、結局。

「う～・・・

肝試しかぁ・・・」

「なんだ、桐崎はこういった類のは苦手なのか？」

「・・・苦手なのよ。

昔から暗い場所とか狭い場所。

昔、洗濯機にハマって５時間動けなくなったあの日以来・・・」

「どうしてそうなった・・・」

都合良く狙った番号が引けるわけも無かった。だが、一条と小野寺がペアになる事は出来たようだ。なんだアイツ、主人公かなんかかよ。そして、俺は桐崎とペアになった。

まぁ、知らない奴とペアになって変な空気になるよりもマシだし、これはこれで悪くない結果なのだろうか？一条に悪いから～とか何とか言えば手を繋がなくても良いだろ。

「しかしまぁ、苦手なら無理して参加する必要もないんじゃないか？
俺としても参加しなくていいなら、参加したくないし」
そもそも参加しなければあれこれ考えなくて済むし、苦手なのに無理してやる必要もないだろ。
「イヤよ。折角のイベントだもの。
暗いのさえどうにかなれば、問題は無いわ
それに、アンタとペアなら最初っからオバケが隣にいるようなものだし」
「そうだな。
普段から影は薄いし、初対面の奴は大体俺見てビビるし。
このままでオバケ役をやってもなんの遜色も無いレベルだろ」
「あ～、確かに・・・
私も最初、アンタ見た時はビビッったもんね。
今でこそ見慣れたけど」
「そーですか・・・
始まるまでもう少し掛かりそうだし、ちょっとマッカン補給してくるわ」
「マッカン～？
あぁ、アンタがいつも飲んでる体に悪そうなやつね・・・

取り合えず・・・は、早く戻って来なさいよ・・・!!」
「はぁ?・・・あぁ、別に今はまだそんなにビビる事ないだろ。
なんなら戻ってくるまで一条の傍にいればいいじゃねぇか」
「べ、別にビビってなんかないわよ!!
なんでそこでもやしの名前が出てクンのよ!」
「なんでって、一応彼氏だろ・・・
じゃぁ、あれだ。戻って来た時ある程度見つけ易いように、一緒にいてくれると助かる」
「そ、そう?・・・そうよね!
アンタが見つけ易いように、ダーリンと一緒にいるわ!
アンタが見つけ易いようにね!」
大事な事だからね。繰り返し確認しなきゃね。
そんな事よりマッカンマッカン。
このままフェードアウトしてもいいかな?いや、それはそれで色々と後が怖いな。

～～～

「なぁ、一条」
「・・・なんだよ
比企谷・・・」
おぉう。悪いな小野寺との2人きりを邪魔して。
しかし、それだとおかしいのだ。
「桐崎知らんか？」
「千棘ちゃん？」
「あぁ。少し離れるから、一条と一緒に居てくれって言ったんだが・・・」
「あー。桐崎さんならさっき森ん中入ってくの見たよ？
オバケのカッコして。
さっき聞いたんだけど、オバケ役の人がお腹壊したみたいで代打頼んだんだって」
暗い場所が苦手って言ったそばから何やってんのあの子？
「あ、いた！一条く～ん！」
「あれ？安達？
オバケの人がこんなとこいたらダメじゃ・・・」

「もしかして桐崎さん戻って来てない・・・？」
「へ？」
「いや実はさー、桐崎さんにオバケ役お願いしたんだけど、
　懐中電灯に電池入れ忘れちゃって・・・。
　もし、気付いて戻ってたら渡そうと思って・・・」
「明かり無いと森ん中真っ暗だもんね～」
「でも別に大丈夫でしょ。
　あの桐崎さんだし」
「むしろ桐崎さんのオバケ役見てみたくね？」
「桐崎さん美人だし、どんなカッコでも似合いそーだもんな」
「どーする？めっちゃ怖かったら」
「オレ、驚かされたら逆にオバケに抱きついちゃおっかな～」
「アホ、殴られっぞ」

　そこまでは聞いていたが、桐崎のいるであろう場所を聞き立ち去った。

　一人森の中を歩く。

恐らく、一条は桐崎が暗い場所が苦手なのを知らない。
桐崎の性格からしても、自分からは中々言い出せないであろう。今回俺が知ったのは状況的に、隠し通せるものではないとの判断だったのだろう。
そもそも他人の本当に苦手な物ってのは知ろうと思わなければ知れるものではないと思う。
今回の様に状況に追い込まれ白状するか、こちらから掘り下げない限りは。
自分から「オバケ怖い～」とかいう奴は誰かしらの気を惹く一種の手段であり、オバケが怖いと言って怖がってる自分可愛いというアピールでしかないのだ。
本気で人の苦手な物を知ろうとする奴は、そいつの事が嫌いか、ストーカー、ドSな人間、後は、テレビ番組のスタッフくらいだろう。・・・最後のはちょっと違うか。
だから、クラスの連中は桐崎が暗い場所を苦手だという事を知らない。
知らないから、自分達の勝手な理想を押し付けられる。例え、桐崎がどれだけ不安に思おうとも「知らなかった、ごめん」で済まされてしまうであろう。
俺はそれが気に入らない。
リア充はリア充としての行動を求められ、ぼっちはぼっちであることを義務づけられ、
オタクはオタクらしく振る舞うことを強要される。

勝手に人に役割を押し付け、その役に沿った行動を取らなければならない。
そして、押し付けられた役から逸脱した行動を起こせば、落胆する。又は、攻撃開始の合図となる。
そして、桐崎は今「皆が思う桐崎千棘」としての役が押し付けられている。
それが本人の意思に沿うものではないとしても。
そしてそれが俺は気に入らない。
まぁ、今回の事でクラスの連中が桐崎が暗い場所が苦手だと知った所で多少の軌道修正を図るくらいで済むかもしれない。
「知らないことは罪」と言う。今回の事なんかでも確かにそうだと思える。
しかし同時に思う。本当に知らないことは罪なのだろうか?と。
確かに法などの観点から見れば、間違いではない。だが、人間関係の観点から見るとどうだろうか。知りたいが故に、踏み込みすぎて弾かれる事だってある。
本当、人間関係とは面倒くさいものだ。
だから俺は思う。ぼっち最高・・・と。

〜〜〜

さて、うだうだと考え事して歩いてきたが、そろそろ桐崎がいるであろう場所だ。
「だーーーもうダメだダメだ!!
やっぱ怖いもんは怖ーーーい!!」
「全く、怖いなら無理すんなっての」
「ひぃぃぃぃ!!」
「人の顔見てビビるとは失礼な奴だな。
見慣れたとか言ってた割には全然じゃねぇか」
「・・・・・・!!
アンタ・・・!?」

懐中電灯に電池が入っていなくて、動くに動けずにいた桐崎を連れ、戻る事になった。
怖いからという理由から俺のジャージの裾を摘みながら着いてくる。
正直ドキドキしちゃうから辞めて頂きたいのだが、そうも言えずにいる。
「・・・大丈夫か?」
「・・・なんとか。
なに、心配してくれんの?」
「そりゃ心配すんだろ。

お前になにかあったかと思うとどうなる事かと」
主にクロードさんとかクロードさんとか、あとクロードさんとか。
「なっ・・・!!
そ、それって・・・」
「ん・・・?」
「っ・・・はぁ。
まぁいいわ。ちょっと聞きたいんだけど」
「そうか。俺は聞きたくない」
「いいから聞け!
・・・カップルが名字で呼び合ってるのって変かしら?」
「そんな事俺が分かるわけないじゃん・・・」
「それもそっか。
アンタだし」
俺だからという理由で納得されてしまった。
いやまぁ、なにも言い返せないんだけどね?
「しかしなんでまた急にそんな事を?」
「昨日、お風呂で言われたのよ。

結構付き合ってるのに名字で呼び合ってるんだねって」
「それって気にするもんなの？
別に付き合ってない男女が名前で呼び合う事があるんだ。
付き合ってるからといって無理に名前で呼び合う必要もないと思うが・・・
それこそ、アメリカだとその辺フランクにやってんじゃねぇの？
・・・・・・まぁ、呼びたい様に呼ぶんでいいじゃね？
友達いないから知らんけど」
「呼びたい様に・・・ね。
うん、そうするわ」

その後、急に桐崎が俺の事を「ハチ」などと呼び始め、その事で一悶着あったりして、結局呼び方を変える事無く決着してしまった。
これを機に、他の奴らの呼び方を変えていくんだと。
それで部屋に戻ってからもワイワイ騒いでいたが、俺はさっさと寝てしまった。
翌日は帰るのみで特に何も騒ぎは無かった。

桐崎が俺の事をハチなどと呼び、周りがザワッとしたこと位だろうか。

こうして、俺の林間学校は終わりを迎えた。

やっぱハチはねぇわ。犬かよ。